

アラジン

—ノルマンディー人
のプロポエ
(下)

翻訳：高村昌憲



百三十一 「考える人」と優しさ

百三十二 生存競争だろうか？

百三十三 郵便配達人

百三十四 社会主義者への演説

百三十五 (法律と自由な人間)

百三十六 (自由な判断)

百三十七 革命記念日

百三十八 (精神の力)

百三十九 (王の人間性)

百四十 (選挙の意味)

百四十一 プラトン

百四十二 政府関係者たち

百四十三 (シヨン運動家)

百四十四 泉

百四十五 無気力な人たち

百四十六 労働者と戦争

百四十七 (軍隊万歳)

百四十八 戦争に反対して

百四十九 リュシアン・ルーヴェン

百五十 ナポレオンの赫々たる武勲

百五十一 軍人精神

百五十二 虐殺の後

百五十三 平和への愛

百五十四 軍隊組織

百五十五 若き兵士たち

百五十六 樵

百五十七 蓄音機

百五十八 ル・ノートル

百五十九 (自由と力)

百六十 (音楽と歴史)

百六十一 (プラトンとの対話)

- 百六十二 猿
- 百六十三 利己主義
- 百六十四 キプリング
- 百六十五 トルストイ
- 百六十六 (作家の現実)
- 百六十七 (スチュアート・ミルの功利性)
- 百六十八 存在するものを愛すること
- 百六十九 十字架の徴
- 百七十 (善き意志)

- 百七十一 村の葬儀
- 百七十二 (死は考えないこと)
- 百七十三 汎心論
- 百七十四 (物質主義)
- 百七十五 中立
- 百七十六 キリストの神性
- 百七十七 牧月

訳者あとがき



パール・ラシェーズ墓地（パリ20区）にあるアランの墓（2012年4月撮影）

ロダンの「考える人」は台座から降り、誰もが着ているような服を着て、列車に乗りました。列車は、何とか作られた線路をゆっくりと進みました。何故なら機関車の水は、線路を進むと揺られてバランスがとれていなかったからです。家々はドアを開けて、ベッドやスプリング台や、洪水の最高位を印した波状の小さな海岸線のような線が入った戸棚が見えました。其処いらが泥で汚れていて、蟻のような人間たちが利用出来る残り物を探していました。時折、列車は川を渡って行きます。幾らか列車は空いています。

「考える人」は家から家へ出掛けました。彼は水の力に驚嘆しました。最も重い家具が船のように浮かび、ピアノと書棚が海戦をしているように見えます。二人の男がピアノを運ぶのに苦勞しています。しかし、どんなに小さな波でもピアノを動かしています。失われたこれらの財産から目を離した時、「考える人」は肥沃な泥土を眼にして、将来の収穫を予想しました。

ここにはその他にも収穫があります。ここには太陽の恵みがあります。食べて暖まって眠ることが出来ます。高貴な女性たちは子供たちにミルク、スープ、肉、毛布、肩掛け、ブラウス、下着を与えます。線路のポイントが通り過ぎて行きます。リムーザン地方の金持ちたちは、角笛を大きく鳴らして、自分たちが幸福であることを示します。そして、客を歓待することしかやることが何もないかの如く話しています。或る工場主は、五万フランと山のように沢山の物を与えました。その寄付を社会党の市長、主任司祭、侯爵たちは共同で使いました。貧乏人たちは、金持ちが貯えていた全財産を見つけ出します。人々は、若い貴族たちが町の銀行の扉を押して這入るのを眼にしました。多分、最も酷い目にあつた哀れな人々や、殆どお金のない貧しい人々は、自分たちが失ったものを取り戻そうとします。彼らは言います、「返して貰おう。約束したのだ。ベッドにはベッドを。戸棚には戸棚を。いいですか、金持ちは私たちの会計係です。週末とか月末に時々正しくないことをやります。多分、時々は少し辛くて苦しかったために、分かりもしないで悪いことをやるのです。しかし、彼らの眼は開いており、私たちの眼も開いております。あらゆる宗教が許されており、あらゆる政治が抱擁して関係しています。私たちは善意と博愛の心を与えるだけで、その他は何もありません。でも恩知らずではありません。主人が私に金を支払ったので、私は主人のために働いて捏造もします」。

「考える人」は或る集団から別の集団へ、注意深い顔をして移動します。しかし、それはもっともだと何故認めるのでしょうか。彼の思想は最後には成り行き任せで漂流するに違いありません。肉体は緊張しないで、伸びっぱなしになるに違いありません。人々はそれを見て、気持ちが静まります。眼の高さまで思考の波が昇って来ます。ブロンズ像となった人間は、涙を流していました。この薔薇色の涙は、何世紀も手間をかけた思想よりも、一分間で彼を気持ちよいものにします。

彼は自分に戻って来ました。じっとして動きません。思考します。人間という河の岸にいます

。彼は自分を取り戻しました。岩壁にいます。恐ろしい考えが次々に現れます。「私は神々に勝った。哀れな勝利者だ。今ここには神々よりも強い人間たちがいる。彼らは私の涙を買える程、大変な金持ちだ」。

(一九一〇年二月九日)

生存競争だろうか、と労働者は言いますが、それは少し使い古されたりフレインです。動物は食料よりも早く繁殖するとあなたは理解していますが、それは多数の死があるということです。そこからあなたが引き出してくることは、戦争は人間にも必要であり、最も強い者たちだけが生き残るだろうということです。私には、余りに根も葉もないことのように思えます。

先ず言うべきことは、人間は大地を耕し食料を自分で増産しますが、それに対して鳥たちは大地に穴を掘ることがありませんし、鳥たちは、必要としている植物を生育させることもありません。人は肥料と水と大地を鋤で耕して、働く者たちに必要な食料を沢山生産します。そのようにして私たちは飢饉を恐れなくても良いように、長い間かかって食料を増産させてきたのだと私には思えます。

その他にも言うべきことがあります。動物は本能に従って生きています。人間にもそれだけの多くの悲惨なことがあります。しかし、現在では何よりも子供の数が少なくて、そのように考えたり反省したりしなくても十分に満足出来ることは経験が教えてくれています。そのことによって私が考えることは、もし人間が少しは裕福になったとしたなら、貯蔵することを上手に覚えるに違いないということです。

今、貧乏な人が何故いるのか、とあなたは尋ねるでしょう。私は答えます。それは土地がないとか、土地を耕す人の手がないというわけではありません。それは生産した物の分配が悪いからであり、生産の組織が悪いからです。先ずは食べ過ぎる人々がおりますが、私が聞いたところでは彼らは珍しい果実や、生産するために多くの労働を必要とする生産物を食べています。その上、労働者の大部分は最も必要とする食料品を生産しないで、贅沢品を生産する日々を過ごします。その結果、労働者は十分に食べられず、住宅も悪く、将来の目処も立たず、子供も産めません。そこで彼らは移住して、他国のパンを食べるようになります。この意味において労働者の生活には或る種の競争があると言うのが正しいのです。しかし、この競争の結果は、自然な必然性によるものではありません。この競争は社会機構の間違いによるものであることが分かります。

アメリカ人労働者を飢えさせに来るのは日本人である、と何時もあなたは言っています。そうです、そこにあるのは生存競争であり、最後には大砲を使うのでしょうか。しかし、その原因を突き止めて下さい。彼ら日本人は誰でも同じように働き、多少なりとも物を消費し、働きに来ている国を豊かにしているばかりであったことをあなたは理解するでしょう。そして、彼らは実際に豊かにしています。但し、豊かになっていくのは、全く不公平な社会的組織の働きで豊かになっていく資本家たちです。もしも生産が働く者たちだけで必要に応じて分配されていたとするなら、日本人が友人として迎えられたのは明白です。ところがそうではないのです。競争と貧困は避けて通れない必然的な悪ではありません。全ての人のために沢山の物があり、場所があります。無いのは〈公平〉であり、パンではありません。

(一九〇八年十月二七日)

真面目で理性的な人間は、法律や憲兵そして収税官にすら好きに感じるに違いありません。完全ではないがまあまあ社会だけが人間的な創意にとって最も有益である、と私は良く言って来ました。私は、更にもう一つの証拠を手に入れたところです。

今朝、郵便配達人がやって来て、私の家のドアを叩きました。私は親しく彼を迎え入れました。郵便配達人は何処でも歓迎されます。庇の付いた帽子を被り、手紙を入れた皮の郵便鞆を持って、彼がドアの前に立つと皆が喜びます。それはまるで好意と友情を結ぶ沢山の糸を、一方から他方へお互いにピンと張っているようです。遠くに住む友人たちは、郵便配達人を使者として私の処へ派遣します。こんにちは、郵便屋さん。こんにちは、皮の郵便鞆さん。

郵便配達人は、私の望みと予定を持って来てくれます。予定とは、つまり未来を割り振り詰め込むことであり、そのとき私は自分の計画を立てることが出来て、未来へ希望を持つことが出来ます。その代わりに、私は百スー(1)のチップの金を与えて握手をしました。それは挨拶程度のものでしかありませんが、私たちはそこで沢山のことを考えたことになります。郵便配達人にもしも時間があつたならば、次のように私に語ってくれたことでしょう。

「市民の君よ、私は政府の臨時職員です。あなたは社会生活を組織するために、定められた期間に招集される国民の代表者しか知りません。彼らにはやるべきことが沢山ありますが、ことが早く進みません。彼らは現在、大砲や砲弾や船舶のことについて議論しています。彼らは適切な給与のアップ率を決める時間が殆どないでしょう。残された時間は、計画の遂行や反対案の作成に費やされます。ところが人は兎にも角にも、生きて行かねばなりません。郵便配達人の私は政府の臨時職員であり、郵便事業を受け持っています。私はあなたが頼んだ手紙や、あなた宛に来た手紙を確実に配りました。一通につきあなたが支払う二スーは、この激動の時代にあつて少額ですがあらゆること、例えば私の履物の維持費に使われ、延いてはあなたへのサービスに使われます。あなたから受け取った年間の分担金は、あなたの財力やあなたに返ってくるサービスによってご自分で決めた額であつて、法律や政令によって決められているのではなく、私たちの間で気持ちが一致したから私はやって来たのです」。

そして、私は次のように郵便配達人に答えることでしょう。「政府の臨時職員であり、社会の実直な役人で、成文化されていない法律の番人であるあなたに私は百スーを与え、そして感謝します。もしも一通づつ手紙を持って来た人にお金を払わねばならないのなら、私の財力では十分ではないでしょう。手紙は小川へ投げ込まれて仕舞うに違いありません。幸いにも、私はあなたとともに社会を作っており、私は平穩に生活しています。何故なら、あなたの友情が私の信頼に答えてくれているからです。私たちのお互いの約束は、法律よりも値打ちがあります。私は郵便配達人を疑いませんでしたし、彼は私を疑いませんでした。来るべき新しい年のために、そして他のすべての人のために、今日この素晴らしい貴重な契約を更新しよう」。以上が、お互いに心

で言ったことであり、私たちは握手をして眼と眼を合わせました。議会での議論よりも早くことが進むでしょう。

(一九〇八年十二月一七日)

(1) 一七九三年の十進法度量衡採用後、一スーは五サンチーム、一フランは百サンチームですから、百スーは五フランです。

選挙の時は、社会主義者を相手に良識ある演説をしなければなりません。先ず、個人の所有権については、それ自体が一つの利益で幸福を齎すものであるが、濫用すると悪になります。独裁は常に悪であり、所有権とか他の原因によって齎されますから、〈打倒独裁〉と大声で言うことが出来ますし、叫ばなければなりません。しかし、〈打倒所有権〉とは言えません。何故ならそのことは火事が起こるから火の使用を禁止するのと殆ど同じ理屈になるからです。その点について一旦理解したら、社会主義者たちはそのことを自分に禁じていたとはいえ、単に断固たる急進社会党員でしかないのは明白のように思えます。何故なら各々の急進社会党員は所有権が常に存在していても、際限なく不可侵で神聖なものとは決して考えないで、言いもしないまでだったからです。例えば独占的企業や買占めは、あらゆる法律を超えて存在していたからです。もしその点について社会主義者の演説家を強く押したいとしたなら、それらの指摘は全てが物事の本質となっている友情や同盟を強固にするのに貢献することでしょう。

二番目に私が言いたいのは、推薦する方法についてです。私が理解しているのは確信と力の二つのものですが、同じものです。何故なら確信が最高に大きくなければ力も無いでしょうし、現在はそれ故に福音を説くべきであって、闘うべきではありません。しかし、その確信が一番大きくなる時は最早力を行使する必要も無く、自然に管理するようになります。勇気のある温かく活発な頭脳を持った人に関して言うなら、彼は沢山の希望を持っており、より小さな意志から最も大きな意志を課すことであり、その中で専制君主になります。それ故に私は次のように叫びます。〈打倒専制君主〉。そして、フィリップ王から反軍国主義者エルヴェまで、一人ひとは酷く叱られるのでしよう。

簡単に言えば、私は進歩についてよく知られた思想を思い出すことになります。所有権という権利に新たな修正を加える必要がある基本的な理由は、道具の改良です。この改良は現代でも続けられています。それは一朝一夕で成るものではありません。法律の結果による変化もそれと同じ歩みで、幾らか遅く歩んでいるのは自然で、それらの結果を理解して良く効く薬を見付けたいと思うのは必要なことです。一八九八年の労働災害に関する法律はこの種の薬であり、経験によって運用されています。それらの回答に関しては、つまり共同財産の中の個人的所有権の変遷は根拠もなく沢山あり、その詳細や状況は良く理解されていません。確かなことは、この種の組織が間違わないことはなく、不正が無くもないことです。物事をより良く見ようとする時、市民は最も単純な場合に共同して行う方法を良く知らないばかりに、それに対応出来ないのは明白です。ところで、何時も用心深い貴族や金持ちや司祭たちの同盟が成立して、彼らの権力が無くならないとしても、少なくとも今までやり過ぎる程やっているように、私利私欲の気持ちが強くなっているとしても、共同して行うというその教育は如何にして可能なのでしょうか。正義のためには一人の後に他の一人が続いて一体化することです。社会主義者を指導する者たちは、この話に耳を傾

けないことが屢々あります。しかし、社会主義者の有権者はこれらのことを大変良く理解しています。

(一九一〇年五月五日)

若い理論家は言いました。「法律は何故あるのか。裁判官は何故いるのか。憲兵と大臣は何故いるのか。人間は何故自分の思い通りに生きられないで、望んだり期待しているかの如くに集団を作るのか」。

賢者は答えました。「それは正に現在も行われていることです。それは過去も行ってきたことであり、これからも行っていくことです。人間に法律を課する超人の力という如何なる思想も私が知っている、とあなたは心に作り上げます。しかし、そのような力はありません。所有することが出来ません。最も常識外れな暴君でさえ、より多くの人々の都合に良いから暴君だったのです。

文学を信用しないことです。そして、物事があるが儘に見ることです。人間は力の限度内で全く自由にこの地上にあります。彼らの中の多くの者は、より有効に自分を守るために集団を作っております。一方の集団は生産し、他方の集団はそれらを守るやり方で労働を分担していますが、悪くはありません。或る警備員が庇の付いた帽子を被り、ピストルを持っていても、自然の法に反するものではありません。別の警備員は縁なし帽子にガウン姿をしており、そして可能な限り喧嘩を防止するのに一生懸命で、そのことは自由な人間と結びつくものであり、自然の法に従って生きているのです。何故なら彼らは本来の用心とか、絶対的な力による強制とは別のものを想定していないからです」。

理論家は言いました。「しかし、法律を正しいと認めたくない人々にあなたは何をしますか」。

賢者は答えました。「彼らもごく普通の自由な人間ですし、皆と同じです。彼らの自由も正しく、力と同じように限界があります。法律に抵抗するのはそれが出来る時であり、出来そうな時です。そんな彼らを敗者だと思いませんか。成る程、自然な本来の自由な状態においては敗者かもしれません。でも法律に従うのを拒むから、人間が火山や急流や群衆よりも強いとは言えません」。

(一九〇七年五月一二日)

アナキストはある意味では正しいです。人間がこの世にいるのは、何時も模倣したり服従したりするためではありません。彼は自分自身でなければなりません。自分の判断に磨きをかけるために勉強しなければなりませんし、行動するのはその後です。例えば、最近金持ちに成った人間が正しいか正しくないか知りたい時、私は裁判官に尋ねに行きませんし、大衆にも尋ねに行きません。私は彼に敬意を表さなければならないかどうか、自分で最終判断を出します。

私たちは判断したり、批判したり、反対したりする高潔な堂々とした精神を決して沢山は持っていません。それらは都市の中の塩のように大切です。敬意、模倣、偽善というあらゆる社会的力は、実際には宗教の力であり、雹や暴風や洪水と同じ位に恐いものです。それらは両眼を持たない力です。不吉な風が民衆の上に吹いているのに、何という嵐、何という逆流、何という渦巻でありましょう。さもなければそれは陰鬱な平和、無為、茫然自失、行列に付いた人生です。人の役に立つ発明や高潔な詩的感興は行列を乱したり、副助祭の誰かとか教会の堂守の誰かとかを跪かせるものです。

そうです、勿論、社会機構も又、必要性のあるものです。孤立した人間は負けた人間です。彼は本当の自由を望んだのに、奴隷そのものです。それ故に人間には団結がなければなりませんし、最も教養ある者は皆のために何かを与えなければなりません。法律という皆に共通している見識でなければなりません。最も無知な者の思考であってもいけませんし、最も賢明な者の思考であってもいけません。社会と個人、それらは私たちの二つの宝物であり、事件が起きると両方を救済するために走り回るようになります。何故なら、或る時は一方が脅され、又或る時は他方が脅されるからです。或る日、行政官であったソクラテスは法によって大衆に抵抗しました。その翌日、若者たちのグループの中で彼は神々や伝統を自由に批判しました。その後、危険人物であるとして祖国のために殺されました。それでもソクラテスには構わなかったのです。

(一九〇七年十月八日)

革命記念日がくると、私は耳のところに小旗をつけた元気そうな馬を目にしました。馬は轡を噛んで、前足で地面を蹴り、丁度バスチューユを襲撃した時と少し似ているような、勝ち誇っている風に見えました。

しかし、それは逆上した哀れな動物でしかないものでした。単に馬の狂気は、前進しないならば背中への刺激、速く前進するならば歯への刺激という相矛盾する不都合な二つの刺激がたまたま起きたための当然のことでした。そして、馬が鞭によって叩かれる痛みと、轡を引っ張られる痛みをうまく理解出来なかったように、背中への刺激は走るのが遅いために当然の結果であると分からせること、歯への刺激は走るのが速すぎると分からせること、それを理解させることが結局、優秀で勇敢な馬を育てることでした。

自由で幸せな幼年時代には沢山の思い出があり、その思い出は眠り、立ち上がり、空想に向かって走り回りましたが、恐らく、それは秩序立って終わるものでした。人は何時も子供でいることは出来ません。野原で何時までも遊び回っては不可ません、将来は賢くなって馬を曳くようになりなさい、と母親は子供によく言っていました、それは二つの刺激に新しい尊厳を認めるものでした。一つは馬を前進させるものであり、一つは馬の前進を止めるものでした。

それ以来、彼は馬小屋や馬の歩行に関する話を良く聞きました。金持ちでも貧乏人でも、全ての人が同じことを言っていました。馬は、大きくなって物分かりが良くなる年になると、二つの刺激で生き、歩くということでした。そのことは自然なことであり、あらゆることをこなす馬の力は、馬たちの立場を良くするために忍耐する能力が全ての馬に与えられている、と誰もが皆同じことを言っていました。香しい草、きれいな空気、燦々とした太陽、新鮮でさらさらと流れる水のことだけしか頭にないと、馬たちは食べること、眠ること、嘶くこと、ギャロップで走ること、風に鬣を揺らすことしか知らなくなって仕舞います。幸運にも、鞭で打たれた背中での痛みや、轡による歯への刺激が明瞭に示していることは、馬たちには全てが許されていないことであり、そのことによって分かることは、それは良きにつけ悪きにつけ馬が、粗野で無自覚な他の動物よりも優れているということです。

馬は全て、これらの話に同意しました。ある日、同意しないでノン（否）と言うために、両耳を大きく振っている赤毛の驢馬がかろうじて眼に入りました。そこから導き出された言葉が、〈ひどく意地悪な〉（1）と言う言葉でした。

（一九〇六年七月十九日）

（1）直訳すると、〈赤毛の驢馬のように意地悪な〉という意味になります。

オーギュスト・コントは〈共和制〉を金持ちたちの独裁であり、それを和らげるのは懲戒の権利であると理解しました。この考えは人々に笑われましたが、じっくりと考えてみましょう。力でしかない力を彼は軽蔑します。最も力のある者が統治しなければならない、と彼は言いました。そこには所謂物理学の原則があります。しかし、もしも精神の情愛がなければ、この種の力による独裁は大したことはない、とコントは言いたかったのです。

現代のことを考えたならば、実際の力の大きさを見て驚くことはありません。勿論、この原則を濫用すると、精神世界と世俗が同一の手の中で結合されていると考えることになるでしょう。実際に我が国の大臣に注意して下さい。彼は単に規則正しく行動する人間でないばかりか、非難したり称賛したりしようとしがちです。不服従と反対が彼らにとっての全てです。事実反抗することよりも考えに反抗の方がぴったりする、と私は心の底では信じます。同様に、兵士は壁を跳び越え、情熱の力で脱走もします。更に、もしその考えがそうありたいと望むようなぼんやりとしたものであるなら、寛大にならざるを得ません。しかし、兵士は一年か二年の服従生活を送ると、自分の考えは完全なものにすることが出来るでしょうし、その従順さによって尊敬する気持ちはこれっぽっちも生まれなければ、異常なものになります。精神の力は根底においては神政政治のようなもので、異端は最悪で、どんなものでも彼らにとっては罪になります。暴君というものは何でも承諾を強要しがります。しかしながら自由に決めて欲しいと思っっていますが、拒絶する者には罰しがります。彼の行為は留まることはありません。力があることで愛されたいと思っています。暴君の愚かさです。

そういうことには反抗して、三権分立を支えなければなりませんし、皆から独立した〈精神の力〉を守らなければなりません。肉体は服従することです。精神は決して服従しないことです。絶対に譲歩することと同時に、絶対に反対することがあります。〈美德〉が実行されるのは稀有です。奴隷的性質の人は余り服従しませんし、敬意ばかり払っています。それとは別種である市民は只、自分の本領を發揮し始めます。一つの秩序を前にして、彼は自分の思想の全てを内部に置き、いわばその秩序を受け入れて、少なくとも理解して実現させるためにそれを適用しながら実行します。しかし、自明なものとして自分に与えられている意見を前にしながら、賛成を求める者や皆を味方にするためにその証言が欲しい者に、要するに拍手喝采の賛同が欲しい者に、私たち市民は断じて抵抗します。そのことを推し進めれば進める程、より信用されなくなり、何時ものようにもし暴君が脅しのために論拠もなく済ませようとするなら、自由である市民は人間としての名誉を、その時は最も完全に心の底でそのようなやり口を軽蔑し、〈力〉も〈思想〉も全てがその価値を下げることになります。もしこの男性的な道徳が実践されれば、暴君は愛のない服従に恐怖を覚えるでしょうし、誠実さと正義によって精神が自由に称賛されることを求めます。従順であることを軽蔑する者が王なのです。

(一九一三年六月二日)

私は王に不幸を願いません、勿論です、何故なら彼は王であるからです。彼にその原因があるのでなく、彼は哀れな人間です。そして、私は大通りの街路掃除人と同じ位に王には大変きちんと礼儀正しくする気でいます。しかし結局のところ、王の中に住んでいる醜悪な不正を忘れることが出来ません。

私は、あなたが誰かに言っているのを聞きます。そこで聞くのは言葉の正確な意味でのアナキストの理論であり、多くは根拠がありません。大変な間違いです。私は、法が極めて不完全であっても秩序があり、法を遵守する人間であることを熱望します。それははるかに良いことです。私は、法や指導者なしでやって行けるとは思いません。それ故に事実として、私は何時もそれを遵守しているように見えるでしょう。私は敬意を払っていると言うのではなく、遵守していると言うのですが、これは同じことではありません。その必要があれば何処かに火がついて、素直に鎖を使って束縛を生んでいる私をあなたは見ることでしょう。擲弾兵のように自分を頼りにする限り、狼に敗れて私は歩くことでしょう。そして、戦争を行わなければならなかったとするなら、私は従順に従うことになり、理屈を言う代わりに金モールの数を数えることでしょう。もし私が歩兵になったとしたら、如何なる感情の時でも大通りを歩く上官には敬礼するようにします。

王はそんなことはしないと私は思いました。秩序や組織や正当な権力には全く関係がありません。他の人と比べて全く乱れていて無分別であり、自分自身に対しても同じです。何故でしょうか。王に生まれたからです。

二歳のアカデミー会員を何と言えば良いのでしょうか。生まれた時から詩人だった人はいるのでしょうか。幼少期にエンジニアになるのでしょうか。彼らの実力は、髪の毛が灰色の老人たちであったとしても、同じように敬意が払われる訳ではありません。正当に尊敬される者もいれば、妙だと思われる者もあり、運が良かった者もあります。いずれにしろ一番下から出発して等級を取得して来ました。生まれた時から金持ちであった金持ちがいることはよく知っています。従って私は、金持ちであるからといって決して敬意を払うことはありません。結局のところ、この場合は特に金持ちであることは人間の上辺の表面的なことです。善良な金持ちという人もいるだろうと思います。でも善良な王が何時か現れるとは信じられません。

赤ちゃんであること、それだけで既に大事にされます。知性の最初の閃きが現れるや否や、人民を表現するのが運命と見做すことです。この道を形にすることとは、読書すること、熟考すること、判断すること、旅行すること、武器や科学とか何でも良いが自らを訓練することであり、眼の前の見通しと共に行うものです。譬え立派な人になるために素直に働くとしても、最初の儘で良いと認識することは、人生を逆さまに見ることになります。子供が狂気じみたことを言っているのを見れば分かります。私が将軍になると思うことは、まさしく王の息子としての狂気です。

。そこから最も強固な良識は、ねじ曲げられた考えに見出します。あらゆる観念は自然と対立して人間ではありません。簡素でさえあり、人の良さでさえその時は間違った何かです。機知に富んだ言葉は最早良く響きません。最も単純な感情が、腹の底から汚染され、中毒になります。演劇の単純性です。豪華な単純性です。贅沢でさえあり、身を飾る装身具であり、物腰です。そして、それは余りに容易であり、やり過ぎます。王は至る所で局外者であり、全てにおいて局外者です。

自分自身で成熟する人間は、大変に高い地位まで行き、偉大なるナポレオンである時も、彼は人間である以上、全ては人間としての観念そのものです。彼は青春を取り戻します。王冠のない時の思い出、人間らしい生活、実際の体験、自由な子供、要するに率直さを少しは取り戻します。彼が綿布とか古紙を売れば、もっと良くなるでしょう。人間的生活という風呂に這入ったのです。それが人間です。そうでないものは殆ど人間ではありません。王の息子だと信じている狂人は無視することです。しかし、王の息子である者にとって人間としてより合理的で立派なものは何でしょうか。私が見る処では、それは侍従によって悪化させていく狂気と同じものです。

(一九〇九年二月二一日)

我が国の女性に選挙権が与えられるには、難しい問題があります。この種の改革の大きな成果を疑う者たちは多分、選挙の本当の力について十分考えず、改革を図る行為よりも寧ろその力に反対することで明らかにしたのだと私は思います。如何なる社会であつても、情熱の働きによって自然に独裁に導かれるような、或る種の力の集中が発揮されます。何故なら力ある者に情熱が無いとか、力そのものを情熱的に愛さないことなどは、不可能であるからです。外交官という者は計画を愛しています。警視總監という者は秩序を愛しています。会社の社長という者は、自分が管理出来る権利や特権を拡大させるために働きます。そして、全てが暗黙の同意を与えているように、直ぐに準則や方法で管理する〈国家〉が作られ、固有の力で支配します。要するに職權濫用は、力による自然の果実であり結果です。そこから生じることは、自由の中に眠る人民というものが束縛の中から目覚めることです。重要なことは前進することにあると多くの人々が言っています。重要なことは寧ろ後退しないことであると私は信じています。私は、〈革命の拡大と永続〉を支持することを明言している個性的な思索家と知り合いです。この曖昧な決まり文句には、大きな真実が含まれています。重要なことは、小さなバリケードを毎日作ることであり、又はもし望むなら、人民裁判で或る王が言うことを毎日翻訳して表現することです。もう一度言うなら、バスチーユの石を毎日増やすのは止めて、それを壊す苦勞を無しに済ませることです。

この観点から言うなら、〈普通選挙〉は極めてはっきりとした意味を持っています。君主制擁護者の代議士を選択する行為だけでも、君主制に賛成する人間になるのです。もし代議士が共和主義者であったなら、更にそれ以上です。しかし、実際はお互いに大した違いはありません。投票箱に投票用紙を入れることだけによって、有権者というものは権力に対して主張するのです。投票することが急進社会党員でいることなのです。そして、この意味において共和国は、各選挙にあって有権者全員がそれに賛成していると言えます。要するに、もし共和国が少しも重要でなければ、自由は死にます。共和国が重要になる時に、それは生きることになります。最初の行動と共に共和国は生まれます。改革、社会機構、新法などのその他のものは、全てが有権者の意志よりも現実の仕事の状況や状態によって多くが決められます。絶対君主も恐らく、労働災害についての法律(1)を制定していたのでしょう。そして、所得税は五十年前から如何なる改正案(2)も実施されておりました。

選挙は主權在民を示しており、多少なりとも王に対する疑念を示しています。女性たちが投票する時は、その投票は普通選挙を示すことになります。共和国になります。この行為によって彼女たち一人ひとりが、権力という土地に小さな場所を占めることになります。彼女たち一人ひとりが、政治権力に関しては同性となって平等になります。そして、共和国の基礎がより良く安定することでしょう。王や利害の奪い合いに代わって投票することは、既にそれらに反対して投票することになります。イエズス会の修道士たちは、礼拝を拒絶した時に、そのことを良く理解し

ました。

(一九一〇年一月六日)

- (1) フランスにおける労働災害についての法律は一八九八年に制定されました。
- (2) 所得税の累進課税は、一九〇九年に下院において可決されましたが、上院は一九一四年にならないと可決しませんでした。

或る哲学者が私に言いました。「社交界へは決して行かない。私は金利生活者ではないし、〈公平〉を愛していると信じている。ところが国家権力に反対している大衆の情熱は、私には公平でない奇妙なものに思える。良く管理された生活は、勇気が理性に仕えて最も理性的部分が支配されているとプラトンは言った。数え切れない欲望に関して言うなら、それらは管理出来ないものである。何故なら如何なる欲望も満足することがないからだ。ところで〈国家〉には頭も心臓も腹もあり、学者であり軍人であり芸術家でもあると私は言いたい。そして、民主国家とは頭を下にして食欲や欲望によって管理されて歩いているように私には見えるし、同じ様に言うとするなら、それとは反対に〈科学〉は侮辱されて鎖に繋がれて、生活に便利な物や薬や麻酔を産み出す単なる快樂のための料理人だ。従って、今は欲望の息子となっている勇気は最早、怒りを掻き立てるだけだ。市民は国家に似ている。市民も頭を下にして気に入る方へ行き、本来〈理性〉によって欲望を抑制するという思想を人間は失っている。それ故に私たちを動物的生活へ立ち戻らせるあなた方の民主主義を私はそんなにも好きではない。それに仕えて守ることに私は決して真の〈気高さ〉を見ることがない。私は寧ろ何かの〈貴族的政治〉を考える。それは自分自身で判断する人間によって国民の中から選ばれた最も博識があつて知性的な人たちが法律を作ったり適用するのである、より多くの人々の信頼と尊敬は何処にもない。現在の間違ひは全てそこからやって来る。そして、内部統制もなく多くの欲望に従って全ての人がそうであるように、頭を下にした偉大な大臣たちとは今のところ何のことだろうか」。

このプラトン学派の哲学者の話に対して、真実をもっと多く含んだことを言うなら一つのことしかありません。それはエリートが理性的であると私は少しも理解していないことです。もう一度言いますが、そうなのです。毎日が戦争だった時、最も勇敢な者が力を持つと考えるようになりました。つまり、状態によっては高い徳を持った人々は自分たちの欲望を抑制する訓練が成されていますが、精神的には未熟です。従って彼らは殆ど何時も外交官や聴罪司祭や法学者たちに導かれていることに私は気付きます。しかし、取分け今日では、金というものが王になっている企業家の時代においては、エリートがだんだんと贅沢な物によって墮落し、欲望に負けていると私は理解しています。そして、プラトンも思いつかなかつた間接的な方法によるものとは肉体労働であるのが分かりますが、贅沢や虚栄心や金銭欲はなく、事物と同じ力によるもので、規律ある精神や本当の勇気や思想の帝国が回復されます。エリートが自分の欲望や喜びのために戦っているのを見て十分に分かりますが、それに反して労働者の民衆は組織された正義のために戦っています。今日では気高い騎士は何処にいますのでしょうか。サンチョ・パンサがいるのは事務所の中であり、ドン・キホーテは工場にいます。もしプラトンが現代に戻って来たら、社交界の〈劇場〉で講演をすると思いますか。決してしないでしよう。しかし、民衆大学(1)であれば行くことと思います。民主主義は手探りで前進します。〈理性〉を探求し、良い面を求めます。私は現代のプラトン学派の人と共に次のように言います。そうです、頭は下に、腹は上にあります。私たちは逆さまになるために働くのです。

(一九一〇年十二月十七日)

(1) 民衆大学は、高等教育の総合大学、アカデミー、学会に反対して、〈国民〉つまり肉体労働者の教育を目的として左派の知識人たちによって創設されました。ドレフュス事件に軌を一にしており、二十世紀初頭に衰退しましたが、アランはロリアン、ルアン、パリで講師をして戦い、一九一〇年にはパリのモンマルトルで講師をしていました。

我が国の共和国は、成熟期に達して以来、若い若者たちを大切にしています。それは物の道理に叶っています。彼らは、婦人向けの内容が書かれている本に、大胆な頁が少し入っているようなものです。そのような若者がいなくなると、一人目の若者は関係記事を収集しますが、なかなか見付かりません。二人目の若者はモロッコ革で出来た本を奪い、宗教と一緒に身に付けるようになりますが、それはタクシーに乗ったり太巻葉巻を吸う権限が与えられることです。三人目の若者は歌を歌う歌手のように何も身に付けていませんが、とても親切です。若者たちは三人ともバカロレアを持っていますし、何らかの法学士の称号を追い求め、舞台裏や化粧室の苦労を沢山経験します。何故なら洗面器の音を立てない良い政治家はいないからで、もし国立大学校の石膏像を拭いた経験がなかったならば、今の大臣たちは自分が大臣になれるとは信じないでしょう。多くの経験を積んで歳を取らなければなりません。

無礼な雀のような政府関係者たちはパン屑を啄み、秘密を啄み、女たちを啄みます。若者たちと一緒に彼らは、フィガロを演じます。そして、老人たちと一緒にシェリュバンを演じます。ほっそりした人々は俳優のバルギを真似しますし、太った人々は俳優のギトリを真似ます。それを聞いてから、皆はイギリス人にはrを喉で発音します。二十五歳になると、彼らは共和国のエリートが如何なるネクタイをするのかを教えに郡役場へ行きます。その上、少し礼儀正しくやりすぎますが、権力はなく、精神的には召使いそのものです。政治を学ぶために其処にいるのに、極悪を学んでいます。彼らは余りに早くパリジャンになり、笑いすぎますし、話が多すぎます。女優の閨房で聞いたことに基づいて余りに容易に利害を考えます。彼らが地方を去るのは余りに早すぎます。地方を軽視するところがあり、実際には地方を知りません。何も知らないのです。従って地方へ戻ってくる時、軽喜劇の軽妙さをもって世間を欺こうと思っている間は、地方の人々を軽蔑することでしょう。何故なら彼らは成熟する代わりに人間味を失っているからであり、頭の禿げた子供として人生を終えるでしょうし、妻に操縦され、生きる術としてトランプのブリッジを習います。

政治家とは、偉大な政治家とは関係なく、公私に亘る仕事によって生まれると私は信じています。殆ど管理されない自由な人々にパリジャンがいるのは少ないと思います。自然と分かります。その様な人は地方にしかおりません。昼間働く時間が長い人に代わって、彼らは直に眼前で観察し、自分自身を観察し、言動を慎み、自分で判断したことを一つに纏め、言うことが出来ることでも半分しか言わないことを学びます。窓ガラスを叩くことしか知らない彼らは、ぶんぶん飛んでいる大きな蠅のようなものです、会話をしていても口だけ達者な椋鳥になったり、絨毯の上を駆け回る可愛い子犬のようなものです。時として彼らも足をすくわれることがあります。しかし、大変に稀有なことでもありますが、それが生きる術を学ぶことにもなるのです。

(一九〇八年三月十一日)

シヨン運動家は、大きな黒いネクタイをしている若者で、所謂ラ・ヴァリエールと言われていて、大義のために新聞を売っています。つまりそれは政治家たちが予想出来なかったことですが、それが政治というものです。そして、それは余りに崇高なものなのです。

彼らは道徳観念的には頑固です。出来る限り純潔です。彼らには結婚させなさい。どんどん子供を作るでしょう。何故なら快樂でしかない喜びは軽蔑しているからです。その上、筋肉を付けて進んでボールを追い、肉体は馬のようです。彼らは肉体を使い、手綱が緩められることはありません。要するに美德に生きようと努めます。彼らを馬鹿にしないことです。馬鹿にすれば、あなたは時間を無駄にします。彼らは救世軍の隊長と同じように世論の正しさを気にかけています。

彼らは素晴らしい議論をします。貧しい人々に心を開き、一生懸命に理解します。何でも素直に答え、行き過ぎがなく礼儀正しく、怒ることもありません。彼らは独断的暴君にしか腹を立てません。思考する自由のためにしか戦いません。

彼らは政治的には急進的です。平等と誠実を望んでいます。法の下での平等であり、法の適用における誠実です。その点について頑固であることは間違いなく、本当の愚直な驢馬です。演説で彼らのことを、あることないこと都合が良いことを言うとか、不当にお金を支払わされても、秩序が一番軽んじられているとあなたは理解しないことです。

「しかし、彼らは神を信じている。そのことをあなたは如何に説明するのでしょうか。最悪の場合には〈神〉の証は決してないということを、あなたは十分に私の同意も得ています。証もなく肯定することが知性なののでしょうか。立派ですが、正しいことでしょうか」と或る人が私に言いました。

あゝ、万事上手く行くと私は答えました。そして、彼らはその上で大変に良く抵抗します。説明されないものを、説明されているようには決して見ません。人が知ること以上には信じられないとするなら、人間は生活することが出来ないと彼らは只言うだけです。もし私が不正よりも〈正義〉を好むとすれば、それは憲兵が怖いからではないと彼らは容易に証明するでしょう。彼らは次のように言います、「それ故に絶対にそれを証明することなく、〈正義〉は不正よりも真実であり、別な言い方をすれば、不正よりも現実のものである、とあなたは信じます。そして、不正に勝利する全てのものが、それと反対のことは決して言わせないでしょう。そうです、それが現実の〈正義〉であり、〈神〉と私は呼んでいます。言葉に詭弁を弄してはいけません」。

彼らは弱いだけです。カトリックを引きずっていて、もしもローマ教皇が命じるなら、シヨン運動家であることも止めることでしょう。カトリックを引きずっていて、うまくいくことはありません。しかし、それが彼らであることを良く理解することです。彼らは敬意を示すのは怠惰からではなく、精神の弱さからでもなく、恐れからでもありません。それは、どんな代価を払って

も人間の社会に留まるためであり、信じることは唯一、最高律の理想を実現させることです。野心や偽善を両手に持った儘にして置かないために、カトリックを引きずってほしいのです。その上で人々は議論することが出来ますし、何でも言えるのです。彼らは個室で小さくなっている限り、大変に値打ちがあり、根本的なことを言っている者たちなのです。

(一九〇九年二月二七日)

水不足です。木々の葉は黄色くなり、人々は嘆きますが、シャリュという金持ちの庭にある泉は、山の中腹から勢いよく水がほとぼしり出ています。人々は水差しやバケツやじょうろを持って大急ぎで彼の家へ駆けつけますが、彼は何も応じようとしませんでした。彼は次のように言いました、「金のためでもなければ、銀のためでもない。この泉は私のものであり、法に基づくものであり、個人の所有権を保護するものである」。そして、彼は家族と共に大きな貯水池を掘り始めました。

その時、人々は討議しました。老人たちは大きなテントの下で、地面に座ってお喋りをしていました。

或る有名な人物は〈制度〉を要求し、その行為から思想までの全てを直ぐに抗議しました。つまり個人の所有権は全ての悪の根源でした。その害だけは、多少なりとも眼に見えるものでした。「その上、原則に照らせば、損害に小さいも大きいもない。不正というものはどんなに小さくても不正は不正だ」。何よりも公共の福祉を行わなければならない、各人が自分の役割を持つのは自分の仕事あり、何が不足しているかを考えて行わなければならない、と彼は結論付けました。

「喉が渇いてカラカラだ」と陽気な男が言いました。

「静かに！」と大統領は言いました。

〈制度〉について大統領が語ったのは五時間五十二分でした。その後は臆病者が話しましたが、彼は短く話す約束をしましたのでそれに応えて三時間二十五分でした。申し分のない論理で〈制度〉が危険であることを大変明晰に指摘し、もしも所有者の権利に口を出し、ほんの少しでも触れたなら、全ての法律体系は崩れたことでしょう。「歯車装置に指を入れるだけで、体全体が入っていくことでしょう」。

日が暮れましたので、夜の食事をすることに決めて、蠟燭に火を付けました。

その時、タティオンは発言して、歴史の一片となる許可を求めます。「何故なら人民は空想に生きていないし、伝統に生きており、水を飲むことを私たちに許すのはユートピアではない」と彼は言いました。

「言葉は私を丸裸にする」と金持ちのベックザレは言いました。

「ベックザレさん、私はあなたに静粛を求めます」と大統領が言いました。

タティオンはその後も四時間六分話し、第四王朝のファラオがやっていた治水工事の研究に話を持って行きましたが、その時大統領は叫び声を上げて立ち上がりました。何故なら新鮮な水のことを気になったからです。騒動が起き、調査が行われ、歓喜の声が上がりました。泉の水は貯水池となって溢れて、滝となり、勢いよく流れて行きました。そして、皆はバケツを持って走っています。

『少女ドリット』というディケンズの小説があります。その小説は彼の最も有名な代表作ではありませんが、私は如何なる作品よりも好きです。イギリスの小説は、ゆっくりと流れる大河のようです。その流れはやっと感じられる程ゆっくりしていて、小舟は前進する代わりに屢々回転します。けれども人はこの旅に旅情を感じ、舟を下りる時は後悔などしません。

この小説から、何歳になっても無気力で大変な肥満の人々をあなたは知ることでしょう。つまりディケンズという名は、お役人と言われている人々のことを知るためには大変に役に立つ作家です。彼が描くのは無気力族とも言うべき人々、お気に入りの家に住んで回りくどい言い方をする役所の人々ということになります。それ故に無気力な人々には、重要な地位についていて権力をもった人がおります。デシム・トナス・モリユスク卿がその人です。彼は上院にいて無気力の人々を代表しています。彼は義務が生じるような時になると、無気力の人々を守ります。両院には無気力の人々の子分たちがいて、おお！とか、ああ！とか言って彼らは世論に曖昧に応えるのが精一杯で、何時も無気力な人々を有利に導いてきました。無気力な人々はあちこちに分かれています、結局のところ回りくどい言い方をする役所には、無気力な人々が大きな群を成しております。無気力な人々は大変に金払いが良いのですが、更に良い時とは自分の両親や親戚をしっかりと結びつけるようになる新しい地位を築くために働く時です。彼らは自分の娘たちや姉妹たちを、ゆっくり落ち着く時もなく動き回る政治家たちと結婚させて、無気力な人々の群に結びついた形を作って、若い無気力な人々の子孫を作っているのです。そして、無気力な男たちは順番がくると持参金を沢山持った娘たちと結婚しますが、そのことは金持ちの義父や義兄弟と結びついて無気力な人々の一族となることであり、将来の一族の揺るぎない基盤と権威と栄光のためでもあります。このようなやるべきことは、常に彼らの頭を占めています。担当の係によって作成された夥しい書類のことなど頭にはないですから、話すのは止めましょう。それ等の書類は、気力を失わせ、信用を失わせて、軽率にも別のことを考えることになり、無気力な人々とその親戚の繁栄のことを考えようとしなくなり、全て破棄させる結果を齎すことになるからです。

それと同じ働きが、私たちの仲間うちで演じられており、多くの犠牲を払っております。鉄道員、郵便局員、海員、公務員、そして軍人にも無気力な人々はおり、議会にもその親戚がおり、大新聞社にも大企業にもおります。無気力な人々は結婚します。昼食会に出席し、舞踏会に参加します。同盟を結び、世の中にのし上がり、身を守ります。調査や検査というものに反対し、あらゆる調査員や検査員を中傷します。代議士たちは、無気力な人々が極めて無知な人間ではないと信じさせようとしています。無知で、酔っ払いで、馬鹿であるのは有権者たちであると信じさせようとしています。取り分け、無気力な人々の精神を保持するように注意し、無気力な人々の一族郎党は同盟を結ぶことが彼らの目的であり、そのことに信用を置かない若い人々を狂気扱いにして将来の道を全て封鎖しているのです。彼らが信じていることとは、無気力な人々の特権がどんなに小さな損害に遭っても、その時は国家が姿を消して国家のことなど考えず、それが彼らの政治であると信じることであり、言わせることでもあります。彼らがそれを行うのは私たちの鼻先であり、自分の身を隠すことよりも私たちの気力を無くす方が有益であると判断します。もしも無気力な人々が好きでないとしても私たちは何も出来ません。有権者は世の

中に対して何も出来ないことを証明するためではありませんが、時折女性がらみの醜聞を生むのでした。彼らは政治家ブリアン（1）を神にしたり、パウルヴェ（2）を考えが雑で思慮のない人にするでしょう。彼らは自分たちの共和国が拒否されたとしても、結局は共和国の方が姿を消すことになります。以下は無気力な人々の中の大人物が最近説明していたことで、私が無気力な人々と昼食を共にしていた時に次のように言っていました。「世界的な崩壊、腐敗、反道徳性、懐疑的態度、無気力は至る所に染み込んでいるが、それでも行政は保持されているとしか理解されないし、その役所が私たちを救っているのである」。

（一九一一年一月二日）

（1）アリスティード・ブリアン（一八六二～一九三二）。外務大臣などの大臣職に二十三回就き、一九二六年にノーベル平和賞を受賞しました。

（2）ポール・パウルヴェ（一八六三～一九三三）。政治家で数学者。下院議長や首相を歴任しました。関数、古典力学、飛行機理論の研究者でもありました。

小さなカフェの奥では政治家談議に花が咲くコーナーがあり、或る商人は最後には民族主義者が十八番（おはこ）でした。只、単に民族主義者でいるばかりでなく他国を征服しなければならぬのであり、少しばかり死者が出てもフランスは偉大で恐れられていて欲しいのであり、結局のところ平和主義者はエゴイストであり、全く単純なことでした。

エゴイストですか？ と日焼けした肌が暖炉の火で黒く見える労働者が言いました。もし私がエゴイストであったなら、戦争を愛するでしょう。そうです。先ずは、兵舎とは何ですか。それは殆ど仕事をしない工場であり、そこで十分に眠って、沢山食べます。主人たちは厳しいのでしょうか。いいえ、違います。もし遅刻をしても隠れる方法があります。そして、決してあなたは除隊処分になりません。最悪の場合には監獄へ行くこととなります。しかし、あなたにはパンがあります。

戦争になれば、もっと良く成ります。空と光です。手に入らなかったものを手に入れます。あらゆるものが全体のためにあります。コミュニストです。もっと良く言うなら、労働しないコミュニストです。そして、その時はあらゆる人間が平等です。塙で囲まれた敷地の中よりも平等ですし、ドアのある家の中よりも平等です。

私は空腹です。商人であるあなたは私に食料を与えてくれます。私は疲れています。あなたが用意したベッドで眠ります。本当に日の出前に起きなければなりませんし、リュックサックと銃を持って歩かなければなりません。しかし、あなたとお話している私は日の出前に起きて、石炭と煙の中を一日中歩きます。炉から圧延機へ行き、赤くなった鉄板をペンチで挟んで引っ張ります。それが私の太陽です。

しかしあなたは、人は戦うために戦争へ行く、と言います。それは本当です。腕の一本や足の一本を取られることもあり得ます。それは工場と同じです。ボイラーが爆発したのは昔のことはありません。鉄が雨のように降りました。そして同時に、水蒸気で焼かれました。私には歯車伝導装置も、車輪が回る貨車も、壊れた鎖も、ひっくり返った鉄製品もありません。しかしながら、誰もそのようなことを考えません。戦争も同じことです。何故なら習慣が全てなのです。そうでなかったなら、戦争は長く続かないでしょう。戦争を行うためには、多くの英雄がいなければなりませんし、人々は英雄たちを見出します。

そして、結局のところ、国を見ること、川や平原や山を見ることは、太陽や月の時刻を認識することであり、夜になって見張り番になる時は、星々が回るのを見詰めることであり、それが美しい人生になります。

それ故に、もしあなたの身分がブルジョアであったなら、私はハンマーとペンチをそこに残して置くでしょうし、歌いながら銃を持ちます。お互いに戦うのでしょうか。勿論、全ては一人でやることであって、辛くありません。それは本能です。少し酒を飲み過ぎれば、人は殴り合います。いいえ、そうではなく、理性的な人間は可能な限り我慢して秩序に敬意を払うに違いないという考えが私にはあります。例え受け入れられなくてもそれ以上のものを与えて、そうするに

違うという考えです。何故なら、或る人が他の人々よりも強かったら、彼の力は人々を殺す代わりに生きる助けに成るのが正しいからです。以上が私の考えです。

この様な話をその労働者はしました。

(一九〇六年四月二二日)

反軍国主義者が私に言いました。「そうです、もし私たちが自分で考えて自覚している本当の国民であったなら、何が起きたのかが分かるのでしょうか。私たちはスペインの代表者が荷造りして出発する代わりに二時間与えたかったのです。未開人と一緒では社会を作れません。大国でも小国でもお互いに大使を持っていて驚くほど女性に丁寧であり、協定で領土を決め、それは嘗ての寺院と同じ位に神聖です。広大な共和国以外にその中の至る所で、商人や旅行者や作家や風刺的エッセイストや講演者たちが持っている本質的な権利は、何を形作るのでしょうか。もしも或る国が規律を欠けば、文明化した共和国によって追い立てられます。そして、誰かがそれを始めなければならない時、フランスは何時も偉大なることを始めたし、始めなければなりませんでした」。

私は彼に言いました。「大変に素晴らしい。その時は他人の仕事でも口を出す時です。私たちはユマニテの保護者、発展過程の改革者、王たちの良心的指導者、権利を守る憲兵を確立しています。一世紀以上も前から私たちがやってきたことですし、事態が如何に変わるかもあなたは知っています。その時は戦争です。それは自由のために結集することです。それ故に予備兵のストライキはもう起きないのではないのでしょうか」。

彼は答えました。「正しい戦争のため、聖戦のためなんて一度もありません。武器が全てです。国境が全てです。私たちには五百人以上の仲間がいるが、彼らが良い例で、人を殺すのが大変に上手くなることでしょう。私をご覧ください。臆病者に見えますか。」

私は彼に言いました。「いいえ、確かに臆病者に見えません。堂々とした兵士です。一人前に人を殺すことが全てではありません。勝たなければならないのです。勝利のためには訓練して、組織的に行動し、武装し、操縦し、アクロバットの訓練をして、射撃をしなければなりません。戦闘や指揮を教えて貰い、軍服を着ます。ですから軍隊万歳！」。

彼は言いました。「勿論そうです。暴君に対して、権利のために武装して戦う国万歳。私は他のことは決して考えません」。

私は彼に言いました。「それ故に、何故あなたは他のことを話したのですか。国旗や兵舎に対してそこで大声を出しているばかりで、まるであなたは残虐な軍隊に入りたがっているようでした。しかし、それは人間性の権利や思想の自由のためには良いことで、あなたは二年間それらを生んでいたのです。共和国の三十五年後を見てください。私たちの軍隊とは暴君に反対するだけのものであると敢えて言わねばなりません。私たちの権利と自由な表現と法律を守るためのものです。そして、フランスにはそのことを要求しない人々に忠告を与え、大声で話さなければならない状況が幾つもあるとあなたが信じている以上、兵舎や国旗や規律を愛することから始めることです。歯をむき出して脅すためには、歯がなければなりません」。

(一九〇九年十月二一日)

再び戦争のことが話されますが、それは恰も明日のためであるかの如くでした。まあ、戦争のことは話さなければなりませんし考えなければなりません、短く切るようにして世論の動きによって外交官を働かせなくてはなりません。

先ずは、攻撃への恐れや些細な習慣への愛着によって平和主義でいるのでしたら非常に悪い態度であると言えます。何故それが悪いのかというと、例えそれが真実であつても仕返しもなく攻撃を受ける儘でいることを、決して信じてはならないからです。それは大変に悪いことです、何故なら真実ではないからです。人間というものは好戦的です。英雄たちは大戦争を起こしましたし、決してそれを選択したりしませんでした。彼もあなたや私と同じ人間でした。訓練によって野蛮性を回復するなど決して言うべきではありません。そんなことは真実でも何でもありません。野蛮性とは、元々そうであったかの如く野蛮だったのです。哲学者は元々そうであったかの如く哲学者でいられます。ソクラテスやマルクス・アウレリウスやヴォーグナルグやその他の多くの哲学者を見れば分かります。そして最後の哲学者という種族は恐らく、恥辱的平和によって神に捧げて野蛮のような人間が勝利するよりも、寧ろ最後の息吹まで自分を守ることにこだわりはありません。従つて誰もが戦争に参加するには動機を持っていますが、皆が参戦します。非常に臆病であると分かっている者たちは除外しますが、そういう人は殆どいませんし、誰も自分が臆病だとは考えません。

私は戦争に参加することよりも寧ろ、最後まで戦う頭が熱くなった人のことを話しているのではありません。そのような人々は最も好戦的です。彼らには戦争も平和もありませんし、戦争の次に又戦争です。

そして勿論、戦争が気に入っています。そのことなくして戦争は決して理解されなかったでしょう。興奮によって、色々な行動によって、大変に早く陥る無頓着によって、隣人を同情することは誰も考えなくなるような不幸で固まることによって、人生を台無しにする詰まらない心配や情熱でついには当惑し進路を変更することによって、戦争が気に入ってきます。何故なら強制された労働は大部分の人間を圧迫し、確かな将来が約束されている訳ではない、と言わねばならないからです。そして、次に取り消しの効かない年齢が来て、その先には死があり、何時も切迫した真実の中にいることになります。暇な時間が出来ると想像力が直ぐに膨らんで、一寸した病気になります。最後には麻痺状態になります。それというのも考える人は、極めて少ないからです。殆どの人が皆、機械のように働きます。戦争は、自分で思考する発明家の才能を目覚めさせることは誰にもなく、野心を際限なく持つこともなく、直ぐに少しばかりの名誉のために、死を忘れるようになり、直ぐに習慣に慣れます。そこには信じられないような瞑想的な生活がありますが、それは何時も観察し考える必要性によるものです。

そうです、勿論戦争は結局のところ正しくないものですし、その周辺もそのものも正しくありません。人間の知恵は水に流されるようなもので、進歩というものはやり直すことにあり、そして外交官や銀行家や空威張りする人々からの避けられない圧力による最も勇敢な人々の殺戮から

、弱い者を軽視するのは悪いことです。そのことを良く考えることです、陽気な兵士よ。

(一九一一年三月二日)

私はこの数日間、スタンダールの長編小説『リュシアン・ルーヴェン』を読んでいました。作者が作品中で特に言いたいことは、ナポレオン一世に仕え、勤勉な人生を送り、軍人の名誉を高め、何時も正義と自由を好むということです。関係の無い私たちにとってもそれは、どこか精神的に完全な典型になっています。何故なら〈力〉を行使して進展する時を止めることがないからですが、反対に成長していくものも殺していました。そして、確かにフランス国民は大凡のところ軍隊に肯定的ですが、現実には軍隊以上に正義のためです。

武装された平和状態がこの地球上ではそれまでなかったものとして、注意して見てみましょう。この一世紀余り前までは、全国民が武装することは想像することさえ出来ませんでした。農夫も職人も商人も銀行員も戦争と平和に耐えますが、実際には戦争にも平和にも協力しませんし、どちらにも加わりません。

或る側面によっては、平和を確かなものにするには決してありませんでした、何故なら少なくとも力によっては決して確立されないからです。そして、大変温和な文明によっても本当の文明に成りません。現代からそれ程遠くない時代に、二つに別れるようになります。風俗は或る意味で温和になり、文化が大変進展します。しかし、戦争の力はそれ自身の中で拒絶されているようなものです。専門の軍隊は外敵を防ぎ、町を侵略し、略奪や強姦やその他の暴力沙汰の悪戯をやらなくもありません。裁判官たちは、同じ位に残酷な方法で国内をしっかりと守りますが、罰としての拷問であったり、残酷な行為への恐怖であったり、自白させるための拷問であったりします。この矛盾は乗り越えねばなりません。そして、〈大革命〉がこの一大事に気づき、英断を下して〈正義〉が剣を取っていました。

しかし、別の側面では、その時代においては美德に力がなかったと言えるのは確かです。ドルバックやディドロやヴォルテールやその他の多くの人々を見れば分かります。彼らの美德とは慎重さでしかなく、古い生き方の術でしかありません。何でも良いから彼らは平和の元にいたと言えます。そして、戦争の力が必要な時は、兵士とか裁判官たちは怒りによって残酷さに陥るのであり、現代の賢人たちにとっては大衆が狂喜する残酷さに陥るのです。それは面と向かった二つのエゴイズムでした。

大革命と帝国の大閱兵式というものは、これら二つの無政府状態を規制したに違いありません。〈恐怖〉のことを考えて下さい。それは罰するという英雄的方法であり、殆ど裁判官にも直ぐに齎されるものです。そして、国の戦争はどれも権利などを要求する英雄的行為であり、まさしく個人を犠牲にするものです。これらの恐るべき試練を辛抱して人間は、有名な皇帝の活動と同じ人生よりももっと貴重な正義という思想に上手く達するか、達しなければなりません。そして、彼はそれを利用して参戦しますが、多分誰も信じられない程です。あるいはその時、征服する技術としての戦争を自分と見倣さなければならず、そのことは成熟した年齢による熟慮の

結果を通して、慎重さや吝嗇やお世辞を導きました。その活動は皇帝が感じているのと同じ結果であり、その時は元帥の誰かに裏切られることでしょう。要するに現代の戦争は通過していくもので、そこに留まることが出来ません。可能な限り孤立しない状態で、義務の感情によってそれを追い越さねばなりません。あるいは動物的力や冷笑的な人によって信仰もなければ法もなく、世俗に舞い戻らねばならないことは良くあることで、それは閉じ込められているのと同じです。それ故に軍隊というものは、今後は不公平を呪ったり、不公平を称賛するという二つの意味を取り出すことになるのです。

(一九一三年八月二九日)

私はナポレオンの赫々（かつかく）たる武勲に感心します。私は、この極めて自然で強い感情と屢々戦いました、何故ならこれらの冒険の素晴らしいものや、決してこの世にないものを見抜くまでには至っていなかったからです。しかし、忍耐と誠意によって、本当の神々は良き場所にいて、地上には悪い神々がいるのである、と全てが整理されるようになります。

若者と老人、新兵と老兵、彼らは決して何も要求しないで全てを捧げる美しい顔をしていました。この美しい話には、殆ど最初は少しも野心も貪欲さありません。勿論、戦争を実行していると直ぐに些細な情熱もきれいにして仕舞いました。彼らは、例え歩かなければならなかったとしても歩く決心をしましたし、例え戦わなければならなかったとしても戦う決心をして、悲劇を超えて十分満足し、そこから彼らは本当の皇帝になります。それというのも人間は自分が主人であればある程、満足するからです。そして、賢明であることは神に等しい、とストア学派の人々はよく言いました。貧しくなく臆病でもなく、意志を守ることです。そのことなくして戦争はあり得ません。役人や富裕者たちが戦争のために働いているとは余り理解されていませんし、兵隊は実際には市民でしたし、そのようなものとして扱われていましたし、功績が絶対的でした。軍隊はジャコバン派に残りました。「人民と軍隊の父、ナポレオン」です。バルザックの小説の中で歳を取った老人も老女もこのように言っています。大臣や弁護士や貴族を震え上がらせたこの男は崇拜されましたが、擲弾兵として何時も一人の友を残していました。かくして〈共和制〉は直ぐに彼の性格と共に消えて行きましたが、軍隊に留まっていた。連隊長の役は、最早金では買えませんでした。実力で獲得しなければなりませんでした。そして、あらゆる人に共通したりスクを伴ったこの能力は、只単に新しい義務を与えていました。君主制擁護者や貴族主義者や富裕者たちは、一瞬たりとも実際には〈共和制〉を決して愛することはないでしょう。〈帝国〉とは逆のその帝国の裡には、何時も人民がおりますし、それには君主制は決してあり得ません。

ナポレオン自身は、自分の軍隊よりも美しくありません。何故でしょうか。自分の栄光のために余りに多くの人々の美德を利用したからです。私はあらゆる宗教において、神よりも信者の方を多く愛します。しかし、神が生きた人間であったならば、その時は危険な仕事が墮落させるのは眼に見えています。人は有名な言葉に従って思考することが出来ますが、彼には沢山の喜劇俳優がいるのかもしれませんが。恐らく、戦場では素直に演じられていました。国王の戴冠式の光輝さがそのことを分らせてくれます。もし灰色のフロットコートと共和主義者のクロムウエルの勇気が何時も守られていたなら、彼は偉大な共和主義者になっていたでしょうし、人民も一人前になっているでしょう。但し、彼らが不幸になることで、現実には間違いを忘れさせました。そして、緊密な血縁関係並びに、平等主義の精神及びナポレオン鼯鼠の自然な結合を、認めないで無視したがる人々は、貴族主義精神と聖職者至上主義に反対しても、現代の歴史を理解すること

が出来ません。

この人民は常に同じで変わりありません。軍隊の精神は、平等を愛することと専制政治を憎むことであり、彼らが見る処では別々のものではありません。ところで軍国主義を良く見ると何になるのでしょうか。それは正義と自由のための軍隊の躍動が全てではありません。それは実業家や貴族やアカデミー会員たちの疑わしい政治が、専制君主制を確立したり、不公平を継続させるために平和時においても軍隊の美点を利用するか、利用しようとしていることです。しかし、その努力にも拘わらず、何時も訓練している者が私たちに力説しているのは秩序に従った思想であり、私たちは次のように言います。「先ずは平等です。先ずは正義です。先ずは主権在民です。そして、それらを全て守るために、必要でなければならぬのなら、戦争です。しかし、それらを全て除いて武装した平和というものは、どんな代価を払っても決してあり得ません」。

(一九一三年三月十九日)

軍人精神の大勝利が、軍人精神の退廃を齎すのは避けられません。一連の勝利とナポレオンの凱旋を想像してみましょう。一番強く受ける最初の印象は、明らかにどんな階級の英雄でも虐殺されるか、びっこを引くかしている印象です。しかし、余り目立たない別の印象もあって、世論においては勝利の次に政治的变化も必然的に起きることになります。何故なら戦勝国においては屢々あることで、勝利軍には何時もあることですが、根深い独裁が指導者や部下たちに生じてきます。悲劇『コリオラン』の中でシェークスピアが血や火に関する行為として軍隊のこの陶醉を描きましたが、それは或る種の勇気に代わって偶像崇拜による他の美德を台無しにするものです。バルザックにも、退役将校であるフィリップ・ブリドーやマクザンス・ジレに同じものを読まなければなりませんし、自尊心や怠惰や法への蔑視が続き、始めにはあった無視する抑制も無くなって殆どが暴力の結果であり、戦争を必要とする者としてそれは最高の美德に代わるものです。サーベルで戦う者の本当の勇気が、賭博好きや酒飲みの飲兵衛や放蕩者の裡にも大変良くあると気付かないでいたことが何度あるのでしょうか。自分の人生にリスクを負っている者は、物事を良く容認します。自然な感情によってそれが許されます。そして、臆病が軽蔑され、従って当然それ以上は検討されない時は、明らかに勇敢な人間であると評価されます。そこから決闘の風習が生まれたのであり、その思想は既に今日でも一般的で、血で侮辱を洗い、勇気がないと疑われた者に名誉が回復されます。

バルザックの小説『姉妹ベット』においても又、勝ち誇った戦争が長く続く期間とは別の印象や別の意味合いを学ぶことが出来ます。非の打ち所がない英雄の顔をした老元帥ユロを見て分かることは、彼の弟の男爵ユロが武器の管理者であったことであり、単純化された人生と、憚ることなく武器を思うように出来ることが習慣となることによって、次に彼らの情熱は盲目的になって盗むまでになったことです。バルザックに戻りますが、彼はここでは歴史家の態度です。何故なら政治的な歴史を書く人々は、一般にそれらの原因まで決して探求しようとしませんし、その結果も書こうとしません。彼らには最初の表面的なことが重要なのです。そこにあるのは力への崇拜であり、自由への情熱であり、法の軽視ですが、それは幸福なる戦争が続いた当然の結果でもあります。そこから身分が高い者には高慢と軽蔑が生まれ、低い者には無頓着が生まれます。現代の兵舎が長年守ってきたのは、何らかの懐疑論の制度であり、些細な義務は馬鹿にされるようになります。そして、もし戦いに勝ったならば、平和にして市民としての真摯な精神を、自由な精神の実践によって形成しなければなりません。それらのことを書かねばなりません。何故なら卓越していると見做される人々には事欠かないからで、月並みな思想として、長い平和や共和国というものは市民を墮落させてきたと言われていています。しかし、それは決して真実ではありません。戦争の勝利は専制政治や墮落へ導くのと反対であるのは必然であり、その代わりに平和や義務の遂行は軍人的美德を生みます。結論を下すために私は確信しているのですが、フランスは誰からも恐れられない元の状態にあります。何故なら大袈裟に言ったり、実際に興奮したり、人民を激動に押しやる必要性を私は理解しないからです。自分に勇気を与えるために大声で吠える

のは、子供の子犬たちです。

(一九一二年三月二二日)

大虐殺後にもものを書き始めることを決心した人の裡にある羞恥と後悔の心の動きを、当てにすることが出来るでしょうか。私には分かりません。しかし、ブルガリア人、セルビア人、ギリシア人、モンテネグロ人の多くの血が大地を肥やしているのは疑えないことですし、その多くは若者たちであり、頑強で果敢で献身的な人たちでした。その収穫に肥料代すらも支払われることはありません。しかし、他に何が出来たでしょうか。そうです、何時でも攻撃することは待てますし、恐ろしい責任感も別の処へ放って置くことも出来ます。最早、ヨーロッパに山賊民族はおりません。一八七〇年に、ビスマルクの外交術というものが、気が狂ったような戦争布告のために使用されたことを忘れてはなりません。実のところ政治家にとっては、外国の大砲が戦争をちらつかせるのは、我が国が諦めて要求を受け入れるのを期待するためであり、それは自分自身で判断するに相応しい機能があると見做すに十分な例になります。

しかし、ここでは所謂二枚舌を自分で理解して、政府は十分に統一されていることです。彼らは言います。「戦争をしたいのは国民自身です」。戦争をやりたい国民というのは、恐らく職が無い人々であり、火を弄ぶジャーナリストに過ぎない上に、戦争精神を持っている人は平和時において大変簡単な演説によって一人で大変に悦に入って称賛し、尊敬され、熱くなっているとも言わねばなりません。私が高校生だった頃、愛国的な話を聞きましたが、その印象は異常でした。如何なるものになるのでしょうか。感染する感情、最も気高い勇気を呼び起こすこと、危険な行動への魅惑、同意されてもいる確信、これらのものは全てが雄弁家と聴衆の若者たちの興奮を崇高なまでに容易に広げて行きます。私は昨日、泌尿器学の博士が開講した講義が終了して、彼の若々しい名誉と仕事が〈祖国〉へ雄々しく捧げられているのを新聞で読みました。読者の称賛は間違いありませんでした。しかし、如何なる時でも彼の気高い職業において称賛によって力を得る人間が、非人間的自然に勝利するのと反対へ誘い、そして平和への術に値するのでしょうか。

私が学生だった時、有名な教授の話を聞きに行きましたが、彼はカント哲学を主題とした授業をしました。私はびっくりしたのですが、彼は始めにドイツ人哲学者が〈フランス人〉に話しに来たことを詫びていたのです。それは慎み深い気持ちを表す術からやったことでした。我が国の敗北や希望ある正義への当てこすりがありました。そして、授業が終わって自然に分かったのですが、哲学や倫理の高い水準の研究には決して国境が無いということです。かすれた声であっても、感動し心を動かされないことはありませんでした。大成功でした。しかし、私としてはこの思い出が何度も思い出されることに、とても軽蔑すべき感情を感じています。彼の慎重さは完全に必要の無いものでした。戦争後に、ソルボンヌ大学でカントが論じられたのは十回目とか二十回目でした。そして、話を外れて戦火のことを思い起こさせて阿（おもね）る術は、怒りを和らげる雰囲気作りを行うものであって、〈政治家たち〉が昔から良くやることでした。恐らく、ブルガリアとかセルビアの雄弁家たちは意識として殺人者の感情を持っていますが、ほんの少しでもそんな感情を持っていると疑われることはないのです。好かれること、そして喝采されて

迎えられることが、雄弁術教師にとっては美しく高貴で理性的なことなのではないでしょうか。そして、フランス・アカデミーは、同日に喝采して敵の前で長官を選出しましたが、正にそれは私が話したこの雄弁術教師がやることではなかったのでしょうか。

(一九一二年十一月十七日)

大多数の人々は、平和を愛しています。それは秩序や平静が好きであるからで、恐怖心からであるとは限りません。もしも秩序や平静を愛することが、少なくとも自然でなくなったとしたなら、動物や事物よりも優れている人間の主権は不可解なものになるでしょう。戦争は至る所で行われているのではないかと言う人々が、その証左として提示するのは怒り、暴力、憎悪、敵対関係、謀略ですが、一方的な偏った議論をします。それというのも最早、戦争をやる人間位、泥棒や遊び人よりもたちの悪い動物、つまり自分を世界の中心と見て全て自分の都合の良いように見る人間はいないからです。そのような人間は多分、皇帝としては都合が良いのですが、一兵士としては都合が悪いのは確かです。戦争は、神秘的で叙事詩的事件であり、青春の若さであり、酩酊であり、狂気であり、少しも自分を愛する精神の反作用ではありません。それは明白です。従って、人間の情熱というものは犯罪的でさえあり、情熱に対する正義や治安が発揮されることは、戦争においては奇妙なものとなります。戦争をより正しいものにするのは正義であり、叡智であり、詩人たちであり、それらが最後には人間の最も美しい特質を明らかにしてくれます。動物界には決して戦争がありません。つまり決して平和もありません。只、蟻たちは除外します。しかし、蟻たちが与える協調の精神、つまり平和の精神は見習いましょう。平和と戦争はお互いに似ています。反対に、弱さと平和は動物の獰猛さと戦争のように、似ても似つかない関係のものでしかありません。

それ故に、大部分の人間は平和を愛すると言われる時、それだけで戦争の惨禍から大変に縁遠いところにいると言えます。そのような人々は、戦争を決して望まず拒絶することさえあるのは本当です。例え事件が起きて戦争になろうとしても、少なくとも戦争だけは回避します。戦争は権力への服従によってしか始まりませんが、服従は平和の美德でもあります。人間が現実の自分自身とは別のものを愛さずして、戦争は続けられません。ところが平和を生むのは、本質的には詩です。秩序とは、人が愛する愚かなことを常に自分に禁じて我慢することによってしか維持出来ません。そこに達しない者が泥棒であり、人殺しです。それ以外は、前述したように出来の良くない兵士です。

それ故、戦争という最も荒々しい敵兵が、何度も戦争を見せてくれることは余りに容易なことであり、彼は何時も戦争をしています。そして、より優しく正しい品性は自然と戦争から遠ざかっていくと信じること、恐らくそこに根本的な間違いがあります。人間は社会的になれば成る程、好戦的になります。平和主義者であるあなたも、明日は戦争を起こして、大変な野心家になり、駆け引き上手になって、思い通りに嫌らしい役を演じるのでしょう。それ故に現実全てが公権力に支配されます。そして事実として、現代は王の権力に最も恋々としている時代であるのが分かります。それは神秘的で、閉鎖的で、秘密だらけです。そこでは、全てを音便に済ませる平和主義者の努力が払われるに違いありません。というのも支配者たちの悪徳と情熱は、人間の力の中で最も純粋で最も気高い殺戮に向かわせる恐ろしい力を持っているからです。ヴォーグナルグ(1)の光輝く言葉をもう一度ここに引用してみます。「悪徳の人は戦争を煽り、美德の人は戦場で戦う」。

(一九一二年十一月八日)

(1) フランスのモラリスト。一七一五年に生まれ一七四七年パリで死去。『省察と箴言』の著者。ヴォーグナルグは雄弁や対話を信用せず、独立した批評家として古典主義作家に倣って書きました。

軍隊組織はそれだけで美しいのかもしれませんが、軍隊は党派やあらゆる政治団体の上に十分共通した感嘆によって設置されるに違いありませんし、そのことは真実であり、絶対的に真実です。軍隊の訓練はまさしく、動物的力とは逆の人間の意志による体系的努力から成っています。軍人以外の養成は、外部的目的を持っています。例えば馬に鉄具をつけるとか、エンジンを調整するとか、セメントで穹りょうの建物を造るとかの訓練がありますが、軍人の養成はひたすら力をつけた人間とか人間の集団を作ることしか目的はありません。それは筋肉を鍛えて歩いたり走ったり飛んだり、個人的な体操が想像されます。それは集団の体操でもあり、一方の人間の動きが全て他方の人間と結びついており、迅速で無駄のない協力が確実に行われる方法です。そして、この教育はそれ自体が絶対的に正しいものです。何故なら不器用でぎこちなく、躊躇い、恐れを成している人間というものを治す傾向を持っているからです。そして、勇気があって、強くて、柔軟で、器用で、力があって何でも言える先生に成りたくない人間はおりません。

組織されて規律正しい力を何に使用させるのでしょうか。軍人は、任務に専心しているばかりではありません。あらゆる計画された行動、防衛、救援に備えます。それを決定するのは市民の権限です。軍隊の力は戦火を消し、洪水から救い、群衆を統制し、暴力沙汰を止めさせ、山賊行為を鎮圧するのに適しています。しかし、その特徴を示しているものは、二次的に必要なものではありません。それは直接的に必要なものです。それは個人の行為によって形成されます。十キロメートルで行われると、次は二十キロメートル、次は三十キロメートルで行われ、速度は加速して、仕事は増大して行きます。それは意志という学校です。何故なら、多くは選択することであり、好きに成ることであると良く分かるからですが、実行することでもありません。従って、良く思考する人間は、まだ人間として半人前でしかありません。そして、残りの半分は同じ行為を繰り返す仕事に人間を閉じ込めます。それ故に実際の自由、つまり障害となるものがあっても、あらゆる行為が行える能力を形成しなければなりません。そして、もし自分を訓練したい者が自分自身に先ず秩序を与えたなら、怠惰や恐怖を許しすぎることになります。以上は、如何に規律が人間を自由に解放するかが分かりますし、それは奴隷化させることと大違いです。そして、そのことによって何故連隊は武器の下にあるのが良いことであるか、恐らく最良であるかが分かります。もし如何なる宣教も、盲目的信仰も、世論の暴力もなく、軍人の行動がやらねばならないことだけをやってきたなら、全てが望ましいことだったと思います。結局のところ言葉ではないのです。

(一九一三年六月四日)

部隊に帰属した五人の若者と一緒に私は旅行しました。彼らは、娘たちのように薔薇色の顔をした優しそうな田舎の職人たちでした。通り過ぎる人々や家にいる人々に先ず挨拶して、とんでもない大声を出し、その次に何リットルもの酒を飲みますが、順番が回ってくるとごくごくと音を出して、トランペットを吹いているようです。こんな風にして彼らは、悲しいことに打ち勝ったのに応じて陽気になりました。そして、確かに私は彼らと軌を一にしていました。彼らは思い出や若々しい性質や後悔や絶望と闘っていました。そして、歳取った時に何でも軽蔑する態度を取るためには、何時も何リットルもの葡萄酒と狂ったような歓声がなくではなりません。

少年の年齢の頃が一番優しいです。もっと若くなればなる程、彼らは冷淡であり、忘れていきます。でも何をでしょうか。彼らの年齢の頃は人を愛したり、夢を見たりしますが、娘たちが笑ったり歌ったりしていても、どんな風に言ったら良いか分かりません。娘たちは既に、十二歳の時から本質的にお喋り女です。その年齢の頃の少年たちは、まさしく人見知りします。何故なら少女の心を持っているからです。町の中で通りに沿って二人で退屈しているのが分かる時は、冷たい視線で見られます。勉強道具、母親、婚約者、花々で一杯の村とは無縁の時です。子供たちを育てない彼らは墮落し、腐って行きます。それは昔からの徴兵伍長のやり方で、そうやって戦争を行う人間を育てるのであり、冷笑的で、厚かましく、諦観し、皆から離れていて、のんき者で、勇気があり、行儀が悪い女たらしになります。現代のモラリストたちは如何に考えるでしょうか。

現代のモラリストたちは、そのことをそんなにも長く考えません。彼らは義務の一覧表を暗誦すべきです。自分の祖国を愛して兵役に就かなければなりませんし、節制し、女性には誠実になり、子供を沢山持たなければなりません。実際に軍人の義務は他人に何でも反対することかどうかは求めていません。今、彼らの一人が立ち止まって私に言いました。「先ずは生きねばなりません。ヨーロッパの状況は明白です。私たちは強い軍隊と少しは悪賢く元気で活動的な男にならなければなりません。そのことが何よりも重要です。先ずは強くなることであり、進んで防衛することです。その次に、出来ることなら高潔になろう」。

それに対して私は、美德というものはしっかりしているものであり、徴兵伍長には気の毒であるが、自分の国のために戦う訓練が行われるや否や、青年たちの美德を先ずすっかり奪うことは全てが良い訳ではない、と答えました。反対に、軍事訓練を行うことは想像上は最も感動的な対象と共に、何時も村や茅葺きの家や友人たちや両親と結びついていたに違いありません。それは現代の宗教に似ています。ルール化されたゲームであり、民兵の祭りです。その次に一人ひとりが神聖な誓いと戦います。小さな部落や村や小郡の伝統と誇りと戦っていきます。ノルマンディーとブルターニュ、ガスコーニュとオーベルニュには素晴らしいライバル関係があると思います

。各々の地方には旗がある筈です。無敵の軍隊もある筈です。武装した家族、武装した共同体、武装した国家です。しかし、兵舎の中で何を教えるのでしょうか。全てを嘲笑すること、悪事を働くこと、隣家へ塵を箒で掃くことです。英雄を作るための、大変に悪い方法です。

(一九一二年四月十八日)

丘の斜面の小さな森は、樵たちが斧を使う季節です。至る所に山積みになった薪束や、倒された幹が見られます。辺り一面に散った木の葉は、まるで緑の霧です。切られた枝や手足のない樹木が、あちらこちらで見かけられます。

詩人は私に言いました。「これらの蛮行は、黙って見ることが出来ない。谷が木々の緑に覆われていた頃は、大変に美しかったのに。森は丘を囲み、其処はこの上もなく美しい調和を見る者に与えていたのに。しかし、今では薪しか眼にすることが出来ない。樵たちは、雌牛が乳を与える様にしか自然を愛していない。彼等は目を開けて、本当の自然の姿を見ることをしない。そして、自然そのもの、在るが儘の自然を愛することがない」。

私は詩人に言いました。「あなたもそうです。あなたも自然を見ていません。樵たちも自然の一部です。樵たちの欲求や行為は、木の葉が芽を出すように、自然そのものと同じです。風や雨や雪や小川が、森の木々を育て、ねじ曲げ、引き抜き、なぎ倒しますが、樵も同じです。木々も人間も、すべては同じ大地から産まれます。ここに割り込んできたのが、詩人のあなたです。あなたは木々に対して多分、礼儀正しく、敬意を表する人です。しかし、木々はそんなことはありません。枯れた樹木が風の力で倒れる時、若い芽を押し潰します。かくして、この樹木が行っていることは、自然を愛する詩人の眼を楽しませることに成っています。しかし、樵が放つ斧の一撃も自然が産んだ力なのです。

人間の労働なくして、この谷間に流れる陽気な声は何を意味するのでしょうか。人間が通り抜けるのが難しい茂みで覆われた沼地か何かがあります。人間の労働というものは、やりたくてやるものではなく、様々に変化する色彩であり、地平線上に作られている窓のようなものです。あなたが言っている美とか調和とか優美とは、鋤や鶴嘴や斧で描かれます。あなたの足元で囁いているのは小川です。人間はそれらの草花や水底の泥濘に、前進を阻止されませんでした。それらの小道や田舎道は人間によって作られました。私は確信していますが、自然が作った草花の覆い茂った暗い屋根や、青い煙のような水の流れを、あなたは軽蔑したりしません。

この様に人間は只、この谷でものを考えるためばかりでなく、田舎の娘が自分の髪を整える様に、この谷に手を入れて飾り立てました。為すが儘にさせて置きなさい。人間は何時もそうした様に、夏が来れば斧の手入れをします。彼等は難なく調和を見出します。それは雨が降り、梢の上に当たって出す音の様に自然です。それに対して詩人であるあなたが、もしも自分の髪を整える様にこの森を整えるのでしたら、一体どの様にするのでしょうか。屹度、イギリス式庭園の様なものにするのでしょう。しかし、私は沢山の薪の束が好きです。そして、静かな森に響く斧の音を愛します」。

(一九〇八年四月二七日)

教養ある人たちはオルゴールに似ています。お腹に二つか三つの小曲の歌を持っています。その歌を初めて聞くのは、傑出した人々の集まりで昼食を取っている時で、幼い子供にも気分が良く感じられます。何故なら彼らの話は輝かしくて素晴らしく、たどたどしく話したりしません。彼らと三回会うと、何を言うのか予め分かりますし、どんな言葉なのかも分かってきます。彼らは自分の作品を楽しんで書く作家たちです。何故なら毎日同じ人々が顔を合わせれば、直ぐに会話に苦しむからです。そこからランプでブリッジをすることになります。

しかしながら、彼らはそんなことをする心貧しい人になろうとは思いません。どんな風になるのでしょうか。黄金の雨が降るように、彼らの上には新しい対象が降ってきます。これらの宝物は彼らの記憶の中で一杯になります。それというのも心の奥深く這入ったものは何も忘れないからです。最も単純な人間が夢見ると、一分間でも百冊の本で一杯になる程に、多くのことを想像します。しかし、彼らはけちに似ていて、金貨を数えようとして閉じ込もって仕舞います。彼らは悪銭のことしか話に出しませんし、何時でも騙そうとして悪銭を使っていました。私は額、両眼、驚くべき事件を書く手を見る時、黄昏時のように変化して行く人間の顔を観察する時、私は最高の詩歌を期待しますし、人間的なナイチンゲールの歌声を期待します。しかし、それらは蓄音機の言葉です。彼らはもうそれ以上考えない、とあなた方は言います。しかし、騙されているのです。それらは詰まらない間違いです。人間が世界の中へ本当の思考を投げ込み、春の葉のように瑞々しくて若々しい思考を投げ込む度に、神は大地を歩いていました。古い伝統以上に美しいものはありません。古いシャンソン以上に美しいものはありません。誰が創ったのでしょうか。多分、羊飼いの女性が自分のために歌っていたのです。

由来は分かりません。何故でしょうか。芸術には経験がいるからです。思想にも経験がいるからです。子供たちが歌を歌い始めるのは学校ですし、アカデミー会員のように話をするのを習います。手始めに、易しい文章を暗誦します。その様にしてやがて自分自身の文章を言うようになります。教育というものは即興を認めないで勉強することです。あなたは下書きをして、清書するのです。ノートを眼で追いながら、習った学課を読み、そして上手に話せるようになります。最も優秀な生徒はアカデミー・フランセーズの講師に成れるまで長時間洗練されて、沢山の批評を丹念に調べたり改めたりして、ついには王様の演説のように荘厳に原稿を読めるようになります。青春は投獄されているようなものです。秩序が支配しています。それでは誰が議論するのでしょうか。誰が即興で演説するのでしょうか。誰が話しながら思考するのでしょうか。三十歳になってレトリックにやられて馬鹿になったり墮落していなかったなら、誰もそんなことはしません。話をして書く人々は、まさに言うべきことは何も無いのです。蓄音機は鳥たちを沈黙させます。

(一九〇八年十二月十三日)

ル・ノートル(1) 生誕祝賀のために、出来の悪い詩句や正真正銘のアカデミー・フランセーズ会員の詩句や少しは増しな散文が読まれます。私はそれよりも園芸家の技術の方が好きです。プラトンは〈共和国〉において、ベッドを作る労働者とベッドのイメージを描く画家との相違を教えてください。如何なる形式の堅さも密度も決まりもなく、イメージの反射を映すようなものである画家の仕事を語るアカデミー会員は、何を言うのでしょうか。カントは次のように言いました。「鳩は翼を広げて空気を押し分けて進む時に、空中で今まで以上により自由に飛ぶことが出来る」。しかし、この古い言葉には見事な多義性を含んだ曖昧さがあっても〈卓抜〉です、空気に抵抗することは、同時に自分を支えることと上昇することが必然でもあると言えます。それは「大工の技術であり、鍛冶屋の技術」でもあります。これは名言です。美術は先ず〈技術〉でなければなりません。単に美だけを望むのであれば、最早何ものでもありません。従って材料に抵抗すればする程、私たちはそれらに触れることとなります。真鍮の薄い板は、錬鉄の塊よりも扱い易いです。石膏は、柏の木を中心部分よりも扱い易いです。紙は、如何なる形にもすることが出来ます。しかし、大地は抵抗します。パリ西郊の町サン・クルーは、ヴェルサイユよりも美しいです。何故なら大地の傾斜は、園芸家が庭園を造る時に生かされていたからです。建築も何より美しいです。何故なら厳密な法則が最高の感覚を生むからで、その創意は何時も勝利するからです。尖頭アーチは、半円アーチだけのものよりも堅固です。重量はそれに協力していました。詩や散文は堅固なお手本を写すことしか出来ませんが、建築の思想は力強く大地の上に築かれて支えられています。ミケランジェロは大理石を彫って彫刻を創りました。そして、大理石の塊を注視しながら形を見出しました。建築は彫刻を超えています。女人像柱は、一体の立像よりも美しいです。職人は芸術家でもあります。

現代のヴァイオリンは、現代の音楽を創ってきました。楓や樅の木材は、同時に音楽家や弦楽器製造人の独創性に影響を与えました。教会の反響する音は、聖歌隊に影響を与えました。これらの必然性を受け入れない音楽は本物ではありません。魂でしかないものは、魂ではありません。アカデミーなのです。

この言葉は言い尽くされています。紙上の宮殿です。美德は労働と区別されています。素材の要らない美です。必要性の無い政治です。シャベルや鶴嘴の要らない園芸です。模倣のための模倣です。議論の上の議論です。文法であり、綴字法であり、辞書です。人民は今も言葉を生んでいますし、本当の言葉や美しい言葉は、何時も手で書いたり喉で声に出して作られ、物音と同じであり、結局のところ実際の行為と同じです。私が子供だった時、頑強な馬丁と一緒に水を運ぶのが好きでした。そして、彼が手桶を運んでいる間、私は手桶の柄を真剣に持っていました。これと同じで、アカデミー会員は園芸家に従っているのです。

(一九一三年五月二五日)

(1) 建築家で造園家のアンドレ・ル・ノートル(一六一三～一七〇〇)は、フランス式庭園の創始者と言われており、ヴェルサイユ宮殿の庭園も手がけました。

科学を自由に判断するには勉強しなければなりません。美術を自由に判断するには勇気がなければなりません。何故なら最早カタログやレットルに囚われなくなるや否や、これ以上に自由に感じられることはないからです。私は批評ばかりしてけちをつける人を気の毒に思います。彼は悪い時を送ることになるでしょう。

或る日、私は家具付きの部屋に住んでいる耽美主義者と言ってよい人に、本を数冊返しに行きました。其処には小像や骨董品が人目につくように置いてあり、じっと見なければなりませんでした。私は魂が惹かれるように興奮しました。あるいは多分、単なる遊び半分から、ゴール地方のものと思われる青銅色の石膏像をどうしても借りたくなるまでになりました、あなたが想像するように、それは長い髯が垂れ下がっていて、投げ槍を持っていました。でもその耽美主義者は無情でした。彼は言いました。「冗談でしょう、これはがらくた市で恐ろしく高い値段で手に入れた品物で、自分の物になった時は眼を疑いました」。私はそのことを思い出すと、殆ど顔が赤く成る程恥ずかしい思いをします。

そんなにも昔のことではないのですが、誰かが自分で作曲した小品を私にピアノで演奏してくれました。私は自然と小さな子供が作曲したものだと考えました。ですから私は熱心に耳を傾けて聴きませんでした。最初の方の音が演奏されるだけで、私には良く分かりませんが、それは平凡で模倣作品だと思いました。そして、突然に演奏される同一の音階には胸が引き裂かれる思いであり、そういうものに私は何の準備もしておりませんでしたし、人の心を打つ力があつたのか無いのかも全然分かりませんでした。私はそれが平凡で重要でないと言う方に傾いていましたし、まさに一瞬そのことを考えました。それはベートーヴェンの音楽と同じ音階で、私が知る限りベートーヴェンの美しい音楽であり、嘗て私が聴いたものであり、大変に美しいと感じた作品でした。私は決して間違っていないでして。何故ならその音楽を知っているからです。しかし、それ故に其処で実際に作曲出来るのであり、耳と眼の帝国へ行くまでになるのです。物真似は原曲の良さも失います。従って、耳を澄ませてよく聴いて、その作品を深く認識することで、単に平凡な批評をすることが出来なくなると思います。経験とはその様なものであり、何が流行しているのか十分に分からせてくれますし、何故それらの評価が情熱や興味に追従するのかを理解させてくれます。ティンパニーや鐘が入る時に、オーケストラとはその時何なのでしょう。全てが上手く演奏されても、最初の狂ったような音は私をびっくりさせます。私は耳を塞いで「サロメ」(1)から逃げました。

慎重に正確に話しましょう。ダンスの時のように足先を決めましょう。ミロのヴィーナス像やサモトラケのニケ(勝利の女神)像で出来た塔を創りましょう。私たちの記憶の中にあらゆる重要な大箱や古くからある振り子時計を全て記して置きましょう。パルテオン宮殿や大聖堂を全て記して置きましょう。私はロワイヤル通りを歩いていた時、マドレーヌ寺院がこの上なく美しく

私の心を捕らえました。でもそれがギリシアの芸術を模倣しただけのものであると決して読まなかったのでしょうか。文章を書く手は何時も批評家でいましょう。そして、もしも盲人に決心をさせなければならないなら、何時決心のバランスが傾いたのかを知りたかった大変慎重な王のように、最後のことを話しましょう。というのも、もしも〈権威〉を手に入れたいのなら、その方法は決して二つもないからです。

そうでなければ、歴史に立ち向かいましょう。廃墟の上で踊りましょう。神々の髯を引っ張りましょう。仕事をして、安いお金にしかなりません。勿論、全てを手に入れることも出来ません。〈自由〉か〈力〉のどちらかを選択しなければなりません。

(一九一〇年八月十一日)

(1) リヒャルト・シュトラウス的一幕の楽劇で、世界初演は一九〇五年十二月九日、ドレスデン宮廷歌劇場で行われました。聖書のマルコ伝からオスカー・ワイルドの劇曲をラッハマンがドイツ語に訳詞したが、正しくはワイルドとラッハマンのものに作曲者が手を入れたものと言われています。

大音楽家の歴史は逸話で一杯です。もし誰かが作曲している間に話しかけたり、動き回るだけでも激昂するのを人々は知っています。これらの行為から私は音楽家が好きでなくなり嫌いになります。ローマ皇帝ネロは、何時も演技しております。しかし、芸術は相応の治安によって名誉が傷付けられます。あなたの音楽は、出来ることなら我慢して聴くことです。オルフェウスは獰猛な動物を手懐けました。鎖に繋いでやり始めたのではありませんでした。

しかし、音楽を聴く時に、じっとしていることや沈黙を守らねばならない場所は何処にあるのでしょうか。そんなことは自然に反します。声を出すこと、歌うこと、リズムのある音を出すと、自然に行為が生まれます。音楽は歩くこと、踊ること、歌うことと一緒です。音楽は耳で味わうのではなくて、喉で味わうのだと誰かが言っていました。彼が言いたかったことは、何でも聞きながら心の中では密かに歌っていたことであり、彼を喜ばせることは人と合わせて歌うことでした。もし講演のようにコンサートを聴く習慣がなく、学校の先生の前にいる生徒のようにオーケストラの指揮者の前で震える習慣がついていなかったなら、それは自然に思われたことでしょう。そして、私はより沢山の自然の自由を知り、音楽に出来ることとは人々が奴隷から逃れたように、音楽や音楽家から逃れることです。

自由に行動することは楽しいものです。支配を受けることは耐えられないものです。そのことはあらゆる芸術にとっても真実であり、私は羊のように従順な多くの傍観者を見てびっくりします。取分け情熱的な芸術家は平安と受動性を示した後にそうなるものと思われています。創造することは最高の喜びです。創造しているのを見ているのは、野次馬の喜びでしかありません。人は手を使いたくなります。芸術とは、誰もが芸術家であり、創作者であり、一寸した俳優で居たいというのであるなら普通の生活を送ることです。社会という喜劇を見れば良く分かることで、演技する人々の楽しみは特にそうです。それ故に私はピアノを聞いたり、大声で吠えることに身を入れる犬を認めます。要するに、偉大な芸術家は合唱隊長に成ろうとしかしませんし、多くの傍観者たちは彼の回りで歌うようになるに違いありません。恐らく、その様にして大衆の歌が生まれた時代というものは、至上の美しさによって気力を失わせるものであり、今日の音楽家は一番力を持っています。音楽が歴史になり始めた時は、退廃に陥りました。

新しい未使用の犁とは何でしょうか。葡萄のシミが付いていない収穫用の籠とは何でしょうか。音楽も別のものによって編まれること、草の間を流れる小川のように騒音の中を滑り込んで行くことを望んでいます。従って、私にとって最高に気に入る音楽は、殆ど聞いたことがないものであってもそれを聞く時であり、音楽に合わせて私が行動する時であり、歩くなら歩調が合い、書くならペンの走りも合ってきます。しかし、未開人たちは何度も大きな声を上げ、吠える犬のようです。音楽家であるあなたは多分、既にリズムに合わせるには少し粗野で、それに目覚めていて、力があって狂喜するには野性的過ぎます。アテネ人のより繊細な雰囲気は、ボイオティア

人の精神に影響を与えましたが、人の話によるとボイオティア人は何も知らなかったのです。そして、アテネ人たちはそのことに気付いた時、既に文法や法則の中に落とされていました。

(一九〇九年八月二一日)

プラトンの亡霊が言いました。「少しも気が狂っていないなら一番良いことだ。あなたが芸術家と呼んでいる人々は情熱を掻き立てたり、あなた自身にあつて欲望という反乱を抱き続けること以外に目的がないように見える。芸術家の立像は全てが苦しんでおり、英知のイメージも同じだ。そして、もしも或る思慮深い数学者とか本質を見抜く物理学者であつたなら、眉を潜めたり肩を上げたり下げたりしなければならず、受け入れないことだろう。彼らを青銅とか大理石と見る人々は同じ方法で体を配置し、顔や手を痙攣させ、自分自身に苛立った情熱を呼び戻し、掻き立てることは避けられない。そこから新しい苦痛が生まれ、張りつめた生活となつて、まるで人生の力というものが胃と結びついているかの如くであり、一方から他方へ柔らかくもぐり込むことはない。あなたはそれらの狂気を全て如何にして閉じ込めないのだろうか。そして、彫られた立像を如何にして閉じ込めないのだろうか」。

私は亡霊に言いました。「しかし、あゝプラトンよ、あなたは上善の精神はこの世の悲惨や欲望や苦痛や苛立ちを免れていると信じているのですか」。

プラトンは答えました。「そのことを言うには及ばない。堪え忍ぶ者は身を隠し、他人の肉体を変形させることはない。特に公共の場ではそうであり、そこでは感情が伝染することによって、誰もが直ぐに顔をしかめた立像になる。しかし、あなたはそんなことを決して考えない。あなたは自分の体を暖めたり、服を着たり、馬車に乗ることに大変に気を遣っているのが分かるが、人間の肉体の均斉を図ることは大変に怠慢で、英知は眼に見えるものばかりだ。美しい立像は情熱のある人間と別のイメージであり、その物腰や顔付きは心の平安や自己抑制が出来た賢人そのものを表しているのではないだろうか。あなたは最も賢い人間として長くいることはないだろう。しかし、大理石とか青銅を加工して、〈賢明〉を形あるものにする。数学者タレスは台石について考察し、情熱は回りに沈黙を生むことになる。そうである、あなたは無用の涙を拭く子供まで理解するだろうし、大河の如く自分自身の人生を流れて行く儘にして置く。事物は〈科学〉の帝国によって存在し、人間が尊厳に達することを私は夢見ていた。しかし実際は、決してそうではない。あなたは俳優で蛇のように身を振らせてもがいており、音楽も立像も同じであり、恰も辛い思いをしているようであり、後悔と狂ったような野心と悲恋は、本当の人間の王国を創ったのだ。此処では石で出来たあなたのライオンが人間に手本を示している、と私は殆ど理解していないのだ」。

(一九〇九年十二月六日)

そこでの講演者はパーティーの第二部におりました。その時の彼は光輝いていましたし、深味がありました。例えば打ち解けているようであり、びっくりしている印象であり、弁証法的で、全てが美しく整列して前進する連隊のような歩みで進んで行きました。そして、聴衆は距離を保って歩こうとしていました。しかし、その講演者はそのサイクルを乱して、テーブルの上に座りました。

彼は言いました。「あなたは私の言うことを聞いて信じています。実際にはあなたが聞いているのは私ではないのです。私は猿と全く同じで、辛いのを耐えて仕込まれました。彼の前で、私の部屋の中で、あるいは町の通りや美しい浜辺で私は熟考し、工夫し、組み合わせます。私は動物のずる賢い眼と耳になりますが、時々であり、それがやや困難な時には、私の前で一節の言葉を彼は繰り返し言います。そして、私はその全文を繰り返し言わせられます。私はそれを聞いて注意します。時には大変に乾いた味気ないやり方に見えますし、あるいは反対に大変豊かで雄弁にみえることも少しはあります。私は自分が猿であることを訂正しますし、削除したり追加したりします。そのことが全て猿を嘲笑することになり、私は望んでいることを上手く手に入れるために単に注意するだけです。時々猿が知っていることを私は発展させることもあります。何故なら猿はそのことを既に、公衆の面前で行っていたからです。その時、猿は全く独りで出発します。そして、私のために或る方法とか別の方法を広げて見せますが、それは私が一番良いものを選択するためです。あなたも知っているように彼は素晴らしい猿ですが、猿であることに変わりありません。勿論、本当は猿が私であったかのように私ははっきりと分かります。私は、記憶を心に定めるような思想の基礎を持っていません。雌鹿が小径に行くように瞬間的にしか止まらない観念の近道を永遠に忘れたと私が信じる時、猿はといえば忠実で、既に永遠を固定していました。猿は私のカメラマンであり、蓄音機です。従って、私は猿と共に動き、変わり、藪を叩き回って獲物を狩り出し、恐れることなく素早く行い、風上にそれらの観念をまき散らしますが、勿論、聡明な動物は何も失いません。聡明というよりも何と云えば良いのでしょうか。猿が知っているのか私には分かりません。どのようにして私は知ったら良いのでしょうか。猿は決して間違えません。もしも猿が何か馬鹿なことを言えば、猿はそれを繰り返して言い、猿を生んだのは私であることを私は知ります。

猿を上手に捕まえた時、私が猿に尋ねた時、あなたは何を知るのでしょうか。そして、確かに殆ど人間の視線で、はい、と私に答え、私はその時あなたにまるでその日の夜に連れて来たように彼を連れて来ます。そして、彼は私をびっくりさせる位に多くのことを話しますが、その夜の私には退屈です。もしあなたの気に入ったなら、私は彼の代わりに続けるでしょうし、出会いに倣って高尚に考えることでしょう」。

その講師はそれ故に即興で演説を行いますが、手探りでやらない訳ではなく、目覚めていた聴衆は彼と共に探し始め、何かの賢明なものに喜びます、そして、それが事の本質でした。しかし、それは寓話でしかないのですが、表面的なことではなく、言葉よりも新鮮で生き生きとして率

直で純真で感動的なことが書かれているのを理解させてくれます。

(一九一一年二月二三日)

国会議員の演説、配布される報告書、よく読まれる記事、大変高額で購入した書物、これらは全てが大変な長文です。出来の悪いレトリックは何処から来るのでしょうか。最も光輝いている小学生たちが独りで身に付けているものを、三頁で言うように教えて貰ったのは何処でしょうか。私には分かりません。教科書に採用されている作家は、お喋りしてくれません。パスカル、モリエール、ラ・ロシュフーコー、ラ・ブイエール、ヴォルテール、ルソーは僅かな言葉で多くを言います。悲劇詩人たちも同じですが、一行の詩句に彼らの思想を閉じ込めることを自然に探求しています。美しい詩句というもの、人々が身に付けていたり引用したりするものは、言えるものなら全てが濃密で傑出しています。それらの作品は僅かな頁に多くの意味を与えています。ユゴーも同じで、彼の文章は時々大変に長く退屈するまでになりますが、美しい表現は誰よりも短いものになっています。要するに手本とは小学生の心を掴み感動させるものであり、何時も無駄が無くて緻密で、豊かな意味を含んだ格言のようなものです。これらの格言で、最も勉強した者は全員、あるいは殆ど全員がその後、何故敷衍したり、伸びたり、冗漫に述べたり、繰り返したり、反芻したりするようになったのでしょうか。というのも講演というものは大変に長く、記事も大変に長く、書物も大変に長いからです。

恐らく、学校の習慣なのです。一般的に二行の格言や二行の韻文や一行の詩句を現実を書くようになって、その様な訓練を生徒たちは決して行いません。反対に、それらを長く敷衍させる練習をします。何故なら彼らの勉強は、何か長く書かれたものでなければならぬからです。四行で創作されたものに賞を与える先生は笑い者にされます。従って手本や定型は忘れられます。取り除いて軽くする代わりに、付け加えて重くします。一つの文章を、三つの文章にします。出来るだけ広い土地を占有するように、言葉を武器のように配置します。探求しなければならないものは、まさしくそれとは反対のものです。

読者の怠慢も考慮に入れなければなりません。走り読みしたり、十行も飛ばして一行を理解して全てを理解したと思っている読者です。勿論、この二つの間違いはお互いに関連していて、饒舌な作者は怠慢な読者を産みます。それに反して、短く簡潔に話す者は注意深さに目覚めます。反対派が急進的であった時には、三行で大臣を抹殺する攻撃文が形作られます。しかし、権力者のものであるなら、それよりも長く重々しい文になります。人を騙したいとか麻痺させたいと思うなら、多分文章や話は長くしなければなりませんし、それを擁護することは何時も長い間継続させていくことが意図されるのに対して、攻撃することはより短くなります。一方は結論のために短く、他方はまさしくそれを恐れるために長くなります。ところで現代の急進派は、全員が大臣の職に就こうと準備しています。それ故に退屈するまでに重苦しく、真面目です。つまり遠い昔に遡ろうとする歴史家の偏見を忘れないでいましょう。歴史は必要ありませんし、あらゆる演説も報告書も重苦しくします。法外な肉や綿を二センチメートルだとすると、税関で大問題になり

ます。外交官や歴史家が学者ぶってペダンチックになるなら、可笑しいですから抹殺しなければなりません。

(一九一一年十一月十一日)

イギリスの小説家キプリング(1)は、ノーベル賞を与えられました。この受賞は何人かの候補者の中から選ばれたものでしたが、私は心からこの選考に賛成します。丁度、その頃の私は彼が書いた小説を何冊か読んでいましたが、それらを読むとフランスのアカデミーから賞を受けた四人の小説家が可哀想で哀れに感じました。何故でしょうか。彼ら四人の作品がつまらなく愚かに感じるのです。何がそう感じさせるのでしょうか。この点については、それを解明しなければならない時には解らないものですが、解らなくても良い時になると解明されるものです。

自然においては、条件が同じであれば常に結果が同じであるか、殆ど同じであると言える結果を起こすものが幾つもあります。例えば、冷たい海水の上に暖かい空気が這入り込んだ状態になると霧になります。それでも、焼串回転器と同じようにはっきりしている訳ではありません。しかし、もしも焼串回転器を細心に気を付けて回すなら、肉が上手に焼けるのははっきり解ります。その理由も何かに譬えて言うなら理解出来ます。夏の太陽がサン・トゥアン(2)の前の舗石を焼いていたとしても、大建造物の影の中に這入っていれば、高い所から足元に涼しい風を送ってくれます。キプリングにおいては、これ等のことが懐中時計の歯車のようにぴったりと接合しています。もう少し付け加えて言うなら、その時計の仕組は分解され、組み直され、そして一つの歯車が動き出すと何故動くのか、その理由と動き方をあなたは知ることになるでしょう。

フランスの若き小説家は、この種のことを何も知りません。自分が書いたことが表紙の厚紙の中では表面的で核心を突いていないのに、法螺を吹きます。しかし、小説の中で事件がこのことを韜晦させるや否や、小説家は生き生きとしてきます。考えること、感じること、主人公に望むことがはっきりしてきて、小説家は私たちにそれを語ります。焼串回転器の一回転がどのように別のものを導き出すかを彼は知りません。欲望や後悔や怒りが小説の中で如何に整えられるのか、その方法を単に知っているだけです。彼は、焼串回転器の中では決して読みませんでした。彼はサン・スベール(3)の煙が上昇したり下降したりしても、風向きについては気にも留めませんでした。でも、ラシーヌの演劇『アンドロマケ』(4)は読んでいました。彼は心理学者になってその机上に一人の人間の性格を組み立て、悲しいかな彼は思考と計画と行動の中から出発させられます。それは、自らの体験による打ち明け話としては不正確です。いや、それ以上でしょう。何故なら打ち明け話の中には、本当に自分の眼で見なければならぬ点があるからです。

反対にキプリングにおいては、焼串回転器が幾つもの焼串回転器を生んでいました。それ等のメカニズムが呪われて故障を起こして軋み、噛みついてのを見ることはまずありませんでしたし、そのようにして一人の人間キプリングが理解されていくのを再発見します。そして、それ等のメカニズムによって彼が話すとき、言葉というものは暴風雨の時に動く気圧計の針のように、偉大性や恐怖を示す貧相な目印でしかないと感じられるばかりです。

(一九〇七年十二月二五日)

- (1) 一八六五年にインドのボンベイで生まれたラドヤード・キプリングは、後に一九三六年まで英国のサセックスでその生涯を送りました。『ジャングルブック』の作者でもあり、最高傑作の『少年キム』（晶文社）は日本語訳もされています。その他に『キプリング短編集』（岩波文庫）もあります。
- (2) 八世紀にパリ北郊に開かれた都市で、十四世紀にフランス国王の居城になりました。
- (3) フランス南西部の町。ロマネスク様式の教会が残っています。
- (4) ギリシャ神話のヘクトールの妻。貞淑な妻、勇気ある母の典型です。

私はトルストイを大変高く評価します。彼は海に輝く灯台のようです。しかし気を付けるべきことは、一般的に彼の思想と言われているものですが、私は特に把握していません。それらの思想は大変簡潔で、十分に明白です。殆ど極めて簡潔で、極めて明白であるとさえ言えます。人間がいる処は、至る処に不正があります。もし自分の感情に従うことなく理性に従って全ての人間が生きたなら、不正を見て、その原因まで遡り、口に出して言うのが容易になり、万事上手く行くことでしょう。困難なことは、或る悪の歯車によっても美德を少しは生んでいる私的な中間的結合を見出すことです。しかし、それはまさしくトルストイが決して望まないことです。それ故に彼の新しい教えは、地上に大した変化を与えないと言えます。何故なら全てが完成されているからです。一人ひとは誰かの役に立つ人間的な生活の思想を形作ることが出来ます。一人ひとはエーゲ海のイカリア島を作ることが出来ます。しかし、イカリア島で生活しません。困難は明白に思想を完成させないことであり、行為を不完全な儘にしないことです。そのことをやり遂げるには、一つのことに集中しましょう。賢明な人というものは老人であり、知恵はかの有名な昔の兵士のように情熱の後にやって来ます。

トルストイの本当の思想を私は彼の哲学以外に見出します。彼の小説の中です。まさしく彼が自分の思想を決して入れようとしなかった小説の中です。『復活』は美しい作品です。確かに美しいのですが、少しばかり道徳的教訓に過ぎる様でもあります。『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』は、間違いなく代表作です。でもそれらの書物は何も証明していません。真実の絵画であり、心理的饒舌はありません。何も説明されていませんが、全て解ります。理解することよりももっと良いものが作られているのが分かります。理解されるのではなくて、登場人物たちと共に生きていたかのようです。一人が登場すると、別の人は去ります。彼は程なく再登場することでしょう。彼らが言うことを分析しなさい。それは驚嘆すべきことではなく、全てが平凡です。彼らは、あなたや私よりも論理的ではありません。けれども彼らがやることや言うことは、期待されていたことです。彼らが生き生きしてくればくる程、殆どそれが解ります。今度は操り糸を探してご覧なさい。決してそこに操り糸はありません。あなたは導入部も展開部も結末も解らないでしょう。そのことは人生という列車を繋げたり、解いたりします。本を読み終えると、それらから惜しみながら別れさせられます。私はトルストイを読む時、ロシア人の善良さを持ち、ロシア人の魂を私たちに描き、全てにキャビアの味を出すことに専念しているこのロシア人の作家を笑って楽しめます。トルストイの主人公たちは今でも私たちの友人です。彼らは私たちに好かれようとしませんが、屢々姿も見せませんが、私たちは好きです。横柄で活発で激しいアンナに何があるのでしょうか。黒い瞳の奥底には何があるのでしょうか。彼女はその秘密を明らかにしないで亡くなります。観念とは別の真実がそこにあります。

(一九〇八年九月二八日)

その学者は私に言いました。「トルストイを読んだところです。この人間は現実を知っています。そうです、あなたはそのことが理解できなくなり、彼は観察して、鉛筆と手帳を持って世界を散歩したのだと私に言うようになるのでしょうか。私が理解しているのはそんなことではありません。彼は本当に現実を知っているのです。彼は現実の中に生きたのであり、その周りを生きたわけではありません。もし馬のことを知りたいのなら、『アンナ・カレリーナ』の中の競馬の話を読んで下さい。厩舎の士官を理解して下さい。そこに書いてあることは、一頁を書くために何年もの間、馬たちと親密に付き合わなければ書けなかったことです。しかし、もっと強烈なことがあります。私は読みながら、夫と一緒にアンナが病気になっている部屋へ這入ります。作者は彼女の病気が何なのか言っていませんでした。しかし、私はその病人の看護をしました。私は部屋に這入り、話を聞き、そして産褥熱だと分かりました。事態が分かっていたら、間違えません。妄想は作者の雄弁によりますし、言葉によります。トルストイは経験に富んだ人生を送りました。知っていることを書いたのです。何も知らない作家というものは何と可哀想なのでしょうか」。

誰かが言いました。「しかし、想像力の文学の話をする時は良く騙されました。才能とは取分け見抜くことであり、再構成することです。沢山の経験をした人々は殆どものを書かないのが一般的でもあると言われていています」。

三人目の人が言いました。「あり得ることです。行動して思考して、そして書くためには長い人生でなければなりませんし、天性の才能に恵まれていなければなりません。スタンダードをご覧下さい。彼はずっとナポレオン軍におりまして、食料監督官でした。従って、誰も経験したことがない戦闘を描写していたことは奇跡ではありません」。

別の人が言いました。「バルザックが想像して書いたのは確かです」。

学者が言いました。「そうです。バルザックは屢々、想像して書いたと私も思いますし、その痕跡を留めないくらいに真実を難く見抜いていたのだと思います。しかし、一点だけ注意して下さい。バルザックが作家だけであった限り、『ジャン・ルイ』や『百歳の人』のように貧しい人々しか彼は書きませんでしたし、そのことを人々は最早語りもしません。しかし、法の決定を実行する執達吏たちと共に闘うや否や、共同生活が彼の中に這入り、力強いイマージュが全て彼の中に刻まれて作品の中に見出されます。それ故に、現代の若い作家たちは皆私には退屈です。彼らは何も知りません。旅行者が湖を見るように物事や人間を見ました。湖では釣りをしなければなりません、何年もです。人は自分の人生やその周辺の世界のことしか語ることが出来ません。ですから現代の若い小説家は、何時も厚紙にペンキを塗った背景を作っているのです。全てが模倣であり、贋物です。言葉にも出ています。それというのも現実を本当に把握し認識するや否や、言葉はそれ自体が美しく整えられると私は思うからです。しかし、もしあなたが素人で

しかなかったならば、現実の調教師ではなく、人が書いたものに全て似せて書くことになるでしょう。詩人シャントクレはその様な作品を書きました。ユゴーを巧みに模倣した作品のように私は読みました。しかし、それと同じ主題について今日生きている五十人の詩人たちは、それと同じ位に美しい作品を創っていると私は確信しています。そして、それよりももっと美しい作品を創っている人を二人か三人私は知っています」。

この会話は、喧騒の中で掻き消されました。

(一九一〇年二月十七日)

私は最近、スチュアート・ミル(1)を再認識しました。彼の著作『記憶』において、一八三〇年と一八六〇年の間でイギリスの急進哲学者と呼ばれていた人々の政治論文に私は注目しました。彼はジェレミー・ベンサム(2)の学校にいて、非常に無愛想な人間で、〈功利性〉の原則に従って喜びと苦しみを測っていました。膨大な政治論文や法律論文の中で、彼は最も有効な監獄を作り出したことを取分け自慢していました。それは監視人の苦勞が最も少なく、犯罪者の苦勞も最も少なく、正直な人々の喜びが最も大きくなった所です。彼は犯罪を解明しました。〈一人であることが喜びで、大勢でいることが勞苦〉、そして懲罰です。これは〈一人であることが勞苦であり、大勢でいることが喜び〉です。これらの定義は男性たちに当て嵌まり、その欠点や長所は我が国のアカデミー会員たちが〈初等精神〉と呼びたがっているものと非常に良く一致しています。スチュアート・ミルと特にその父親は、この精神を実現させました。彼らは平凡な知識人という英雄たちです。

スチュアート・ミルは何でも読み、全てを理解しました。彼は屢々神秘的觀念を抱き、そこに奥深さや美しさを見ておりましたが、まさに時々見ており、上辺だけの謙虚さではなく、率直さそのもので認めていたことは、自分自身はそのようなものを産み出せないということでした。あるいは商業や工業や軍備を確かなものにするために、最も強い国の制度だけを示している時代の真実として確定している見解に従って、彼は凄い歴史的觀念を眼で見て測っていました。例えば完全な民主制は、君主制よりも民主制そのものの中に最早真実が無いと言わせるようなことですが、その時は民主制を実現させる国家の力によって真実になります。そのような思想には表現上の高貴さがあり、そして驚くべきことに、どんな制度にも合致するためにはどんな野心も許されています。

しかし、高貴なスチュアート・ミルが、如何にして情熱や不公平に大変好意的で報われた意見を彼の精神から拒絶されているかを理解するのは美しいものです。彼は〈功利性〉を固く守ります。自分の心の全てを、心以外のものに専念します。彼は乾いていて、術学的で、的確です。その結果は次のとおりです。彼は〈共同体〉に立候補することに同意します。しかし、選挙には一スーも使うのを拒絶します。何故なら投票を金で買うことは、間接的であっても〈功利性〉の原則に反しているからです。その同じ彼が普及版の本を安くするために著作権を放棄したのも、何時も同じ原則によるものでした。競争相手が或る印刷された文章のことで彼に真っ先に不満を持った時、それが民衆を決して喜ばせないからといっても、彼は憚ることなく公然と認めるのでした。彼は少しも譲歩せず、只自分自身であること、そして全体の利益だけを考えて選挙で選ばれました。(常に〈功利性〉です。)彼は女性の参政権のために働き(一八六六年!)(3)、アイルランド人の貧困問題、黒人問題、弱者や無知な人々のために働きました。その思想は自発的に収斂されたものであり、素晴らしい人生です。それは思索する者から主張する者までのこと

であり、まさしく相反するものを私たちに見せてくれています。表現における崇高さと、現実における力への諂いです。

(一九一三年十月二五日)

(1) ジョン・スチュアート・ミル (一八〇六―一八七三) はイギリスの哲学者で経済学者。彼は自由経済 (『政治的経済の原則』一八四八) 及び功利主義的道德 (『功利主義』一八六三) を強く勧めました。

(2) ジェレミー・ベンサム (一七四八―一八三二) は、『賞罰論』を刊行しました。

(3) 連合王国における女性参政権は、一九一八年に成立しました。

人は自分でも良く理解しない儘、我が身に受け入れなければならないものが幾つかあります。その意味で言うのですが、宗教とかかわりなく生活する者は一人もおられません。世界とは一つの現実です。その現実には理性は従わなければなりません。空の星々を数え終わる前に、諦めて理性は眠りにつかなければなりません。子供は木片や小石に怒りをぶつけます。多くの人々は雨や雪や雹や風や太陽を非難しますが、それはすべての関係を良く理解していなかったことから起きます。これらのすべての出来事は、何者かの勝手な命令に従ってあちらこちらに水を撒く勝手気儘な庭師が天上にいると信じられているからです。人々が祈ってお願いする理由がそこにあります。祈ってお願いすることは、この上もなく無宗教的行為なのです。

しかし、出来事の〈必要性〉を少しでも理解した者は最早、〈世界〉について考えようとしません。彼は次のことを考えません。この雨は何故降るのか？ ペストは何故あるのか？ 何故人は死ぬのか？ 何故なら、彼はこれらの質問の答えが少しも見付からないことを知っていますから、決して考えようとしません。人が言うことが出来るのはここまでです、という具合です。そして彼は何も言いません。存在すること、それは何ものなのか正体が分かりません。このことは理性というものを、粉々に粉碎して仕舞います。

仕方がありません。私は真の宗教的感情とは存在するものを愛することにある、と信じることにしています。しかし、存在するものは愛されるに値しないものなのではないでしょうか。明らかに違います。迷うことなく世界を愛さなければなりません。存在するものに頭を下げて、敬意を示さなければなりません。湖で溺れるように、自分が本来所有している理性を殺さなければならぬと私は望みたくありません。そのように理解するなら最早、人は何でも構わず敬意を抱くことがなくなるでしょう。人生はそんなにも単純ではありません。人が所有している〈理性〉を尊敬しなければなりません。そして、出来る範囲で正しいことが判断出来る〈正義〉を実践しなければなりません。そして、この原理・原則についてじっくりと考えて見ることも行わなければなりません。如何なる理性も存在を与えることは出来ません。如何なる存在も、自らの理性を与えることは出来ません。女性は出産しますが、出産は発明を行っている一人のアルクイメデスとは全く別のものであります。

〈緑の森〉へ行くあなたは、早春の水蒸気に湿った梢を手に入れます。木々の葉が新鮮な太陽の光を受けて広がっているのを良く眼にします。やがて、成熟して種子が出来て、大地に落下します。もしも人が望むなら、それ等の種子は各々が運命を所有していて、芽を出し、成長し、高い木になると言っても良いと思いますが、それは多分百万に一つもないでしょう。そして、殆どの種子は腐って仕舞います。しかし、あなたはそのことについては考えません。あなたは自分の両眼を開けて見て下さい、自分の耳で聞いて下さい。素晴らしい神の火と同じものが、あなたの裡で再び燃えます。あなたは、自分も大地の子であることが良く分かります。あなたは、この太

初からの世界を崇め、あるが儘のものとして受け入れ、すべてのものの存在を許します。さあ、行きなさい。友よ、あなたは祈りに行きなさい。私の耳には既に、復活祭の鐘の音が聞こえてきます。

(一九〇八年四月一日)

これから話すことは、泥だらけの子供たちにキリスト教を教えに行かせている私の友人で、田舎に引き籠もっている白髪の女性が語ったことです。彼女は私よりも信仰心がないと言った方がよいと思います。それ故にキリスト教の教えは、精神を洗い清めるための一般的な倫理を学ぶ機会でしかありません。全てが木材で出来た教会の尖塔は、唯一のもので事が運ばれていきます。それはその地方の慣習です。私は今、その話を書き写してみます。

或る時からクルート家で暮らすようになった浮浪児は、それまでこの地方の洞窟にいたのですが、或る日彼女の家の呼び鈴を鳴らします。「可愛い子ね、何が欲しいの」―「私は祈りとキリスト教を教えて欲しいのです」。これが毎日続きました。子供は自分が行く場所を手に入れます。十字架の徴を教えて貰います。「それは何の役に立つの」は子供の言葉です。「平等と正義と愛と侮辱の許しを教えるために十字架に磔となったキリストの徴です。その徴は、人が怒りとか復讐とか憎しみとか軽蔑に耽るときに思い出させてくれるものです。それは恰も〈正義〉の精神とか十字架に宿っていて、救済される時が来たかの如くです」。要するに、十字架の徴を誰かに言うことが出来る者であるなら、決して十字架は衰えません。

一週間が経ちました。怒りについて人は語りますが、何時もキリスト教の言葉が出てきて使われます。そして、子供たちの一人は皆が弱いことにいち早く気づき、次のように言います。「怒りっぽいのはミシェル（宿無し子）です。昨日、彼はアンドレを追い掛けていましたが、手には大きな石を持って、〈お前を家に行くまでに捕まえてやる〉と言っていました。しかし、（彼を嘲笑し馬鹿にして）ミシェルは突然に止まりました。恐くはないぞとアンドレに言いながら十字架を切って石を投げましたが、アンドレには当たらず無事に家に帰ることが出来ました」。

私は雪の平地を横切って行きました。そこには車の轍もありませんでした。私は足を火に当てて温め、以上のような話を聞きました。トルストイはこういう話の塩梅を良く理解していました。小さな放浪者のミシェルは最早、洞窟に戻ることはありませんでした。従って、その話の続きもありませんでした。それ故、沈黙が訪れ、白けた雰囲気になりました。

情熱とその激しさの証拠となるものが肉体の活動に依存していると理解するためには、それでも奥深い知識が必要です。怒りを鎮めるためには、拳を解いて開くだけで十分です。しかし、最初の瞬間に、自分の思考が手に優先されると誰が信じるのでしょうか。でも、それは本当なのです。先ず、あなたの敵に対して考えていることが正しいと思っただけではありません。先ずは口を開けることです。手を開くことです。膝を曲げ、頭を下げることです。それというのも生きていくことは他人を苦しめる前に、自分自身が息苦しくなるからです。それ故に、プラトンが望んだように第一に自分自身に対して正しいこと、人間として尊敬出来ることが重要です。かくして、先ずは体を動かすことによって、思考は情熱を鎮めて小さくします。その時、人間的な感覚を取り戻してくれるのは観念だけです。しかし、もしもその結果が眼に見えるならば、それらの原因は自然

に隠されるでしょう。そういう訳で古い時代の信仰は、儀式の時の動作が真実の精神を呼び起こし、天使のように外界へ齎されます。言葉にするのは大変難しいのですが、世界の平和というものは司祭の天使のような動作で説明されて、二十世紀になりました。しかし、司祭は両手を組み合わせたり、離したりして祈りますが、それは自分の身を守ることのない動作です。そして、そこには本質的に奇蹟があります。それというのも、一つの動作が全体を変えているのは本当であるからです。この動作を考えなければなりませんでした。そのようなものが平和のための本当の祈りだったのです。もしも、あなたが平和を理解したいのなら、まずはあなたの武器を置くことです。

(一九一四年一月三十一日)

祈りには善がありました。それは事物に順応するための心の動きでした。しかし、神がすっかり駄目にしました。その時、人は愚かな怠惰とか恐怖とか熱狂に陥ります。怠惰と恐怖は奴隷化であり、熱狂は既に狂気です。修道士の狂信的行為にも少しはそれと全く同じものがあるように見えます。子供は夜を怖がりました。それは自然な感情であって、年齢によっては有益でさえありました。子供は現実を作りますが、それは化け物です。化け物は鍵穴を通過して来ますから、そこにいる用心深い者は狂い出します。かくして凡そ神を創ってきたのも人間で、神は修道士を創りました。

私はサヴォア地方の助任司祭が行う有名な洗礼の誓約に感心しましたが、本でも屢々読んだことがありました。それは朝の一時間で、足元に広がる大地には村々から煙が昇り、人々が働いているのが眼に見え、急流の川や岩のように彼らの回りには大きな力があり、〈必然性〉に目覚めた心には何というイメージでしょう。人間は弟子です。人間の視線は鐘楼から鐘楼へ飛んでいきます。信仰、希望、慈善は人間の気高いものです。この心の動きは真実です。このことを知らない人間は、既に死んだのです。

「人が神のことを私に話す度に、私の自由と財布を狙っているのである」。このことを考えなければなりません。このことを言わねばなりません。何ですか。ジャン・ジャック・ルソーは、私の先生になる前はプルドン(1)の先生ではなかったのですか。ええ、先生でした。心の最も正しい働きに反対して組織された宗教があります。ええ、信仰に反対し、希望に反対し、慈愛に反対するものです。ローマ教皇はそのことを私たちによく思い出させることを望んでいました。ええ、神が望んだ限り、不安などは不正義ではありません。正義とは服従です。慈愛と貧困は、永遠に暗い谷を、一方が他方を引っ張りながら、金持ちの救済に向かって行くのでしょうか。しかし、この小さな排斥は私に何を生むのでしょうか。ジャン・ジャック・ルソーは言いました。

「何故、神と私の間の人間なのか」。私は今回だけは先生の授業をよく聞いて、私の番には次のように言いたいのです。「何故、正義と私の間の神なのか」。しかし、先生が頬笑んでいるのを私は見ます。私は先生の思想の動きによく従いました。私は光る谷、貯えた力、人間の仕事というものをよく理解出来ました。正義を生んだのは勿論人間であり、神を生んだのも勿論人間です。小さな情熱を超えたこの心の動きの中や人間的動きの中で私は両方とも再創造しますが、言葉は何も生みません。信仰と共に、希望と共に、慈愛と共に、人間に偉大なる作品のために働かなければならないと私は感じています。それはローマ教皇の宗教ではないことを私は知っています。先生がそのことを私に言ったのです。しかし、ロザリオの祈りを唱えるのは善き女性であり、彼女の瞑想が言葉よりも長持ちしないかどうかを如何にして私は知るのでしょうか。善き意志というものは常に寡黙であり、常に人間の思考を全て生みます。私は神を無視しますが、この哀れな善き女性は信じます。おお、高貴なジャン・ジャック・ルソーよ、あなたの話は私を興奮させ

てくれます。私は夜の化け物ルー・ガルーなんか恐くありません。

(一九一〇年九月十八日)

(1) ピエール・ジョセフ・ブルードン (一八〇九～六五) は社会主義者で、アナキズムの創始者です。

人生には立たねばならない仕事があります。座ったり、眠ったり、跪いては、何も善いことはありません。こんな考えを私が持ったのは、村の葬儀に参列した時です。雲は低く垂れ込めていて、絶えず日射しを覆っていました。山の山腹まで蛇行している道が見えます。それは石畳の小道で石段があり、真っ白な古い教会には簡素ですが申し分のない尖塔アーチのオジーヴがあり平和そうでした。ぴったりとした外観、礼拝の歌声、儀式の隠された部分に人々が感じたのは、自ら死を知る生者たちのきちっとした礼儀であり節度でした。何故なら私たちには、やらねばならない仕事があるからです。その重荷は私たちの肩に沢山乗っています。一緒に歩くしかないのです。何故なら私たちは、車で運ぶ驢馬ではないからです。同様に、荷鞍が私たちが傷付ける時も、人間としての仕事であると私たちが思うのも余り自然ではありません、というのも自然は知らないうちに死ぬからです。オジーヴや礼拝式のように、それは人間に関わる全てのことでなければなりません。それらは多くが大地によって支えられているに違いなく、両側の足は多くが等しく、規則的に歩きます。司祭は私たちに頭を下げさせたいと思っていますが、儀式がまっすぐにさせています。

あらゆる典礼は完全です。私たちの節度とぴったりです。私はそこに超人的なものは何も見ません。人間であれば十分でした。この歩み、歌、形式、証言、学んだ礼儀は、絶望を規制するために規則正しいものでなければなりませんでした。

眼や耳が塞がれて、自分とそっくりの不幸は何処まで落ちて行くのでしょうか。あるいは絶望そのものに目覚めて、自分にそっくりの最悪のものでさえ、何とも酷い無秩序へ身を投じるのでしょうか。しかし、ユマニテ（人間性）は全く反対で、きちんと整理されていて、次のように言えます。「私たちはそれが何であるか知っている」。

勿論、そう言っても良いのでしょうか、この群衆の中で誰が身を投じて大地に刺さって良い理由が沢山あるのでしょうか。そうです、金のために働く者たちのように、そんな姿を見せて傷付かないのでしょうか。しかし、その動物性を隠すのに衣服があります。この様にして儀式は苦痛を衣服で立派に覆います。宗教は全てが余分な人生においての真実であり、少なくとも言っていることは嘘です。それというのも、もし神が天国にいたとすれば、恐怖とか怒りの大声を上げないのはどうしてなのでしょう。勿論、共通の理性、私たちと同じ大地という娘、しかし大地の中で最も美しい果実、そしてもしその中から一つでなければならぬなら、神がおりますし、神に従った勇気が肉体に従うのは同時です。そこから一人ひとは苦しみを超えて立ち上がり、遠くを見ることを覚えます。眠ってはいけません。跪いてもいけません。人生には立たねばならない仕事があります。

(一九一一年九月二日)

私たちは死について何の認識もありません。私は隣人の死のことを話しません。彼の人生は彼のものであり私たちのものではないように、私たちは彼の死も彼のものでしかないのにそのことをよく知ることが出来ません。もし自分自身の話に戻るなら、その時は私たちは最早、死を心配することだけしか分からないのです。

眠りは死の弟であると言われていました。しかし、死は夢を見ないで眠ることであるのを、私たちは正確には良く知りません。死は全てが何ものでもありません。夜にこの世のことを考えるのは、既に考えすぎです。もしも眠りとか死のことを考えたいのなら、もう全てを考えてはなりません。従って説教師たちは、人生に害毒を与えるのを仕事としており、説教を聞く人々が如何にしたら怖がるかと思っているのでしょうか。彼らは終身の強制収容によって死と置き換えているのです。彼らは既に、死後があることを仮定しています。

大変に長い間一般的であったこの信仰は、何処から来たのか良く知られています。夢想は多くのものを受け入れます。何故なら夢想の中で、死者たちは行ったり来たりしますし、話もします。しかし、眼が覚めると全ての幽霊は消えます。そこから夜は死者のものであり、昼には逃亡させているのがこの信仰です。

しかし、信仰の源はそこにはありません。自然に、永遠であると信じるのが人生です。全ての人の人生は、自分自身をお互いに愛していることさえ、私はそこから聞きません。更に言うなら、人生は死を信じません。人生は死を否定します。生きている者が死ぬことを考えるのは、この上なく耐えられませんし、そんなことは不可能です。

私が墓の上で毎日考えたとしても、それ以上考えられなくなるまで考えることは決してないでしょう。常に私は自分が生きていることを仮定しています。私がいなくても、この世は百年、千年と存在すると考えようとしみます。勿論、私は自分を何時も観客であると仮定しますが、それと同時にこの見世物が私には決して見えないだろうとも思います。私は他人の眼には見えなくなり、誰の眼からも見えません。しかし、私は自分が存在しないことはあり得ません。私は世界を照らす炎を時間と空間の中に、私と共に至る処に持って行きます。星雲なののでしょうか。私がそこに存在するのは、そのことを思考するからです。死んだ太陽なののでしょうか。そのことを思考するから、私はそこに存在するだろうと思考するのです。人生は死を思考することは出来ません。ダンテは地獄へ落ちた時に、死ぬことを無視していました。それ故に死は彼の前に現れ、地獄に落ちた人々の齒は軋んでいたのです。

以上は私たちが常に生きていることを確かにしているあらゆる証拠の源です。私たちには証拠は必要ではありませんでした。人生の美德によって自然に不滅の自分を思考します。もしもその根源に行くなら、私たちが人生の存在を信じることが出来る証拠となります。この〈美しい希望〉があらゆる希望としての今の財産であり、それが私たちの外部に根拠を置いているか否か言う

ことは出来ませんが、私たちの裡には良く把握されていました。そこから偉大なる英知が人生の規範を引き出していました。つまり死のことは考えないこと、そして常に生きているに違いなかったが如くに生きることです。「前へ、墓標を超えて前へ」とゲーテは言いました。

(一九〇九年三月一日)

「宗教から独立したあなたの非宗教的道德は、物質主義に汚染されている」とアメリカ人が私に言いました。そして、「そこからあなたが小学校の時の教師や大学の教授や管理者たちは無能だったのだ。彼らは死んだ穀物の粒を蒔いている。全ては物質であると信じる者の裡に、如何なる希望と信頼と感動があると言うのであろうか」と言いました。

私は答えました。「もしもその通りであるとするなら、あなたは何を言いたいのでしょうか。市場で鶏肉を選ぶように人は考えを選びません。自分の宗教を信じた人々は、役に立つから信じたのではなく、真実であると信じたからです。今日、科学的真理を支持する人々は、別な言い方をすれば確認したり理解することに専念する人々であり、彼らは最も安易な解決を選択していませんと信じることです。信じることや信じないことは、選択ではありません」。

私の哲学教授は答えました。「成る程。しかし、あなたが指針としている科学を採用したとしても、その結果、全てが物質であるということから品位を下げた主義を取り入れるようにはならない。私は古い精神主義と新しい科学の両立に期待することを主義としている者の創始者である。その主義とは汎心論である」。

「ええ、よろしい、承知しました。それで、その汎心論が言っていることとは何でしょうか」。

「物質が何であるかも分からないのが物質主義者たちであることに、私は先ず注目しているのだ。彼らは物質が原子又はそのような要素から出来ていると仮定するが、そのことの直接経験は誰も持っていない。それで、もし私たちは全てが直接経験の魂であると言えるとしても、何故、存在の典型として物自体を見ないのだろうか」。

「しかし、それは拳骨の一撃ではありませんか」と私は言いました。

「その通り。物質主義者であるあなたのシステムにある拳骨の一撃は、肉体をぶつけて傷付ける肉体でしかない。あなたは本当の肉体を知らないし、衝撃も知らない。この私が言うのは、魂から魂への行為である。その中で意志は打ちのめされて魂となり、それを受け入れた者に意識と苦痛が生まれ、彼も又魂となるのだ」。

私は言いました。「よろしい。しかし、その時私の魂がここで、もしも北京に住んでいる中国人の魂に拳骨を与えたいのなら、その中国人は拳骨を受けるでしょうか」。

彼は言いました。「勿論、そんなことはないし、何も変わりはない。あなたが肉体の上での肉体の行動条件を命名するものを、私は魂の上での魂の行動条件と命名する。従って、科学的真理は失わずに保存されている。あなたの知性に何の犠牲も払わせない条件で、物質主義だけが負けたのだ。そこには未来の教義がある。試行することは、それを自分のものにするのだ。それでは、どうぞ、このパンフレットを見なさい」。

(一九〇八年七月二十日)

古代ギリシアのエピクロスとか古代ローマのルクレティアの時代の、古代の物質主義者たちの本を読むと、詩的感動と自由を手にする英雄的感情が最後に発見されます。この感情はまさしく何時も生き生きしています。私はそれを民衆大学で観察出来ましたが、そこは注目すべきこと、非物質的魂とか本来的に所有されている自由のための主張が全てであり、打ち勝つことが出来ない偏見を通して非宗教的な自由思想に反対する運動のようなものがあります。或る日、殆ど世界的混乱が注目されることになります。何故なら良識は私たちの運命や情熱に力を及ぼさないとしか仮定しないからです。正義を望む者は宿命論を否定します。そして、物質主義は自由を否定すると理解させて来たのが最も力を持ったカトリックの結論である、と公の場で大変な激論が行われていたのを私は見ました。しかし、偏見がなく公正な聴衆は、物質主義の基本となるものを正確に思考し、彼らは事物をしかるべき所に置き直し、それらの原因となる情熱や夢想を送り届け、予言、奇跡、超自然的で異常な独裁、宿命論そして最後には奴隷制を減らそうとする意志でもあります。そこからは大きな障害が生まれます。しかし、それらの問題を分析することは文化を押し潰す、と仮定してそれを信じるのは間違いです。注意力をもって偏見無しに考察された幾つかの事例は、偏見という最も危険なものを持つ精神のシステムよりも遠く離れた所へ導いてくれます。

先ずは、例えば日食や月食を思考しなければなりません、そして、最初に恐怖に打ち勝ち、前兆を排除し、他の結果によって明らかに予想出来るメカニズムの結果という驚きべき現象の中で認識された思考による厳密な仕事を、十分に考察しなければなりません。私は、如何にして一人ひとりが自分だけの方法で、この仕事を繰り返し行うことが出来るのかを十分説明しました。その計算の正確さは事物を正確に知らせるためにしか役立ちません。しかし、太陽や月の運行を観察した者は、日食や月食が三日月とか満月よりも神秘的な現象であって、それ以上は何もないことを良く承知しています。そのことによって、私たちは精神世界を追い払うべきであり、それが厳格なる知識人の義務であることを確立しましょう。頑張りましょう。

勿論、そこで私たちの自由も認めて良く理解して置きましょう。私たちの心の裡であり思考するのが役割であって、私たちの外部ではなく事物の中でもありません。食卓の脚に精神を探さないうで、思考という機能の中に自分という精神を全て拾い集めること、そこに決定的な経験があります。そこから私たちは立法者の機能というものに気付き、主権者として土地を耕し、水を撒き、家を建て、清潔にしてそれを行使しましょう。そして、社会秩序の中においても、今後は裁判官も裁くことです。そして、精神的力を私たちに与えるものは、物質主義の思考に基づいた最初の思考です。そこから良く見て下さい。物質主義の思考と自由な行動は、創意工夫し、法律を制定し、社会を立て直すために何時も一緒です。奇跡は一つしかなく、幾つもの奇跡を否定するのが思考です。この公式が宗教を完成させます。

(一九一二年七月二八日)

聖職者支持者たちが言う中立とは嫌な言葉です。主任司祭から出ている観念であることを認めるには、〈事務所〉で三十年間眠ったように働いたことがなければなりません。小学校の教師はあらゆる種類の信仰を知っていなければなりませんし、あらゆる種類の宗教を説明しなければなりません。もしあなたがこの思想の王国を全て管理するのに十分知っていないと言うのでしたら、それは微分法を知らずして天体の運動を語れないのと同じです。人は何時も語れるようにして、そこから始めなければなりません。私はそこから継続して行うことも、終えることも出来るようにと言うのです。

人間と自然には血族関係があり、この血族関係には小径が通じていて、何時でもいわば味わいがあります。何故なら人間はこの地上で生まれたからで、この世界の中で暮らす家があるからです。抽象的な理念は、ここでは何も変わりません。外見的なもの、寒さと空腹、暴風雨と火山と微生物があるにも拘わらず、それらを無視して〈神〉は私たちの役に立つようにこの世を整え、家具付きの家のようにしたのだとその主任司祭は言いました。人間はこの地球の息子であり、ご存知のように最も完成されていて力があり、この地球の息子たちとも順応している、と私なら言います。地球の自然と人間の性質には確かに一致している処があり、そうでなければ人間は一分間といえども生きられないでしょう。この様にして人間にあるのはこの地球との友好関係であり、信頼、天気の良い朝や昼や夕方そして四季を通じて希望が生まれ、風が吹いたり、雨や雪が降ったり、雷が鳴っても希望が生まれます。従って動物のように逃げ回っても、人間は感動して見る心を失いません。いずれにしても〈希望〉、友好、敬愛があります。「眼が覚めた日には敬虔でありなさい」とジャン・クリストフは老いた伯父に言われました。

今では人間同士は親戚です。それは大変に明白です。人間は出来ることなら何とか一人で生きられても、社会を維持するのは恐怖である、と馬鹿者は考えます。恐怖ではなくて親戚です。誰でも最初は母親の一部でした。人間は東になって生きているのであり、一人で生きているのではありません。いずれにせよ友愛であり、慈愛です。自分以外の者への思いやりであり、連帯感であり、連帯して行動することの喜びであり、連帯して喝采することの喜びです。連帯を信じることであり、従って神はおりません。

連帯する〈理性〉によって、今までとは違うやり方で人間は全てが親戚だと思ふことです。死んだ人々や見たこともなかった人々と、書物を読んで親しくなることです。上善を知る時、全ての人々は教育されて、上善に成るだろうという思想を持つことです。人間としての尊厳と人間は全てが平等であるという思想は存在しないものであっても、存在しなければなりません。正義という意志であって情熱ではなく、進歩という意志であって墮落や先祖返りではありません。何と言っても信じることです。〈信仰〉と〈慈愛〉と〈希望〉は、人間の最も奥深い愛情です。連帯の生活、連帯の感激、自分の家や自己から出た外部の生活、それらは信仰であり、救済です。

連帯する理性のための孤独な生活です。それは瞑想であり、それも又最良の救済です。もしも司祭がこれらのことをたった一人で言って間違っていたとしたら、人々は彼の言うことには直ぐにもう耳を傾けなくなるでしょう。

(一九一一年十一月二三日)

神父ロワジーは、もう大修道院長ではありませんが、ルナン（1）に非常に良く似ていて、今なお僅かに主任司祭に留まっていました。二人とも歴史家です。二人とも問題の周辺を回り、皮肉を込めて議論し、古い資料に当たって、十九世紀以来見失っていた文献を生むことが出来た巧みな思い付きに、この時代の人間生活がぶら下がっていることを純真な人々に信じさせるものでした。それらはまだ未熟な堂守たちの遊びです。外観は無視して貝殻を砕き、そして質問の核心に行かなければなりません。

例えば、もしイエス・キリストが本当に神であったかどうかを知ることが重要です。それは歴史的問題でもないし、事実としての問題でもないと思います。今、事実のものとしての命題を意味することが出来ているものを理解しなければなりません。イエス・キリストは神の子です。つまりイエス・キリストは神です。

ピエールとかポールの子であるという意味において、神の子であると信じるには、大変な田舎者でなければならないでしょう。そのことは精神生活と一致していなければなりません。あるいはその時は、笑っていなければならないだけです。ところで精神生活に一致するとは、何を言いたいのでしょうか。それはキリストよりも大変に古くからあったもので、全ての人間が精神的な親族であるという考えを持ちたいと思うのと同じ位に古くからある思想です。人間が認識し証明し、議論する方法は似たり寄ったりです。それなくして論争を考えることさえ出来ないでしょう。科学はないでしょうし、科学の教育行為もないでしょう。でも高貴な精神の人は沢山おります。プラトン、アリストテレス、ストア派の哲学者たちです。彼らは福音書から学ばなかった人々であり、人間は全てが永遠で不変で完璧な理性を授かっており、それは世界の精神とか魂と言っているようなものです。その意味で私たちは完全に神の子です。少なくとも、それ以上でも以下でもありません。正義とか愛によって人々を再び暖めるまで、人間がこの神の火を燃やし続ける時、それを神と言い、神の子と言うのでしょうか。

一度このように定義されると、人々が望んだようにイエスは神になり、神の子になったのである、と私はよく言いたいのです。福音書に書かれていることは不確実なものであり、悪魔が取り憑いている三百匹の豚のように可笑しい物語であるのは確かであり、豚たちは溺死しに行き、私の記憶に留まることもありません。私に出来ることは歴史的に見ることであり、〈毒舌家〉として歴史を扱いながら、神の名において神の子の肖像を私に創らせることです。

神と同じ概念を判断することは、その儘残されています、つまり〈永遠の理性〉です。でも最悪の場合には証拠を示せないことを私は認めます。それ故に問題は、事実上それを信じるのが良いかどうかを知ることです。つまり信じることは、勇気や忍耐や正義や善意を生むかどうかです。考古学上の埃をきれいに拭いたならば、それは議論するのに良い問題になります。その時、この信じるのが人間を救済し、如何に正しい認識力を持っているかどうかを理解することに

なるでしょう。自己の裡に全く孤独になってそれを持つことが出来るかどうかですが、それは熟考によるのか、あるいは連帯を瞑想すること、儀式や音楽によって内面の炎を再び燃やしてそれを暖めなければならないかどうかです。それは多分、重大な問題です。今日の問題であり、明日の問題でもあります。社会学の問題であり、所謂、歴史の問題ではありません。

(一九〇八年二月十九日)

(1) エルネスト・ルナン(一八二三～九二)は作家・宗教史家で、『キリスト教起源史』全七巻(一八六三～八三)を著しますが、その第一巻は有名は『イエス伝』です。宗教的感情と科学的分析を結びつけることに専心し、イポリート・テーヌ(一八二八～九三)と共に当時の文学者たちに実証主義の影響を与えました。

六月は一年で最も美しい祝祭の月です。私は田舎へ引き籠もった親友たちに数日間招待されました。それは素晴らしい〈牧月〉(1)です。草は密生して生え、青々としています。樹木は道を包み込んでいます。全ての木々が緑色に広がり、太陽に呼吸しており、一本一本の樹木が各々固有の色をしていて、透き通っています。何故なら、木々の葉はまだ柔らかいからです。ひなげしの花が灰色がかった青い麦の中で、あちらこちらに輝くように咲き、目立たない飼い葉の中にあっても最高に美しいです。艶のある青い色は穏やかで、ひなげしの花と反対色の基調です。青空は全ての色調を結びつけます。太陽の光という矢も大地に打ち込まれ、二度と跳ね返って来ないかのようです。道端に咲いているのは薔薇だけです。単色だけで趣があります。手入れをする訳でもないのですが、勝ち誇ったように咲いています。薔薇よ、万歳！

暖かい日には、乳白色の靄が立ちこめました。大空の端から端まで雷鳴が鳴り響き始めます。続いて、最も激しい呼び声のような雷鳴と同時に、雹のようなものが降っている音がしますが、花々にとっては余り害はありません。一陣の涼風が吹いた後に、大地の上の太陽の丸いイメージは揺れて動き、梢を通して笑っているようでした。

それは前奏曲に過ぎませんでした。本番とも言うべき光景は、夜のためにありました。月光に似た長い黄昏時が終わる前に、地平線辺りから、轟きが聞こえてきました。雷雨はその時その時に色々な降り方をします。或る時はぶつぶつ口ごもるように降り、他の時はぱちぱち拍手をするように降りました。稲妻も色々な光り方をしました。北の空では白い光が爆発したように光り、西の空では丘々の上を赤い炎が走っていくように光りました。その中間の大空は、大地から発せられた曲がった矢のようなものが大空に穴を開けているようであり、やがて曲線となって再び降下してきました。突然、突風が吹き上がり、黒い雲が現れて分厚い煙のように私たちの頭上にやって来ました。人々は大騒ぎであり、抱き合ったりしましたが、何時も雨が降る訳ではありませんでした。

お祭り騒ぎは何事もなく終わって貰いたい、と人々は言っていました。風は雲を一掃しました。雷鳴は逃げ去り、再び何かのんびりとした光が射して来ました。私たちは大空に、王のように輝く木星を見ることが出来ましたが、今はもう沈んで見えません。頭上には牛飼座のアルファ星アルクトウルスが赤く輝き、南の空には蠍座のアルファ星アンタレスも同じように赤く輝き、琴座のアルファ星ベガは青い星で、美しく光輝く星の一つですが今は真上の大空に輝いています。これ等の星々は、最も懐かしい調べのようでした。ヒキガエルのフルートのような音、コオロギの高い鳴き声、だんだんと小さくなる梟の優しい鳴き声が聞こえて来ました。その時、右手方向の泉の近くからナイチンゲールの鳴き声が歌い始めました。最初は雄々しい男性的な三音の呼び声で、次に花づな装飾で飾られた刺繍のような旋律が展開されますが、それ等の声は三音のよく似た声で三回繰り返されました。その歌声は憂鬱そうであり、悲しげな声としてしか私には聞こ

えません。しかし、私がそこに感受したのは威圧的で殆ど狂暴とも言える情熱的感情であり、小鳥の持っている力というものです。それは小鳥が飛び立つ時にも大変に良く感受出来るもので、多分この世に生きるものの能力の中で一番驚異的なものだと思います。夜のこのコンサートは、友好や友情に関するプロポを、自由に何でも書けそうな気にさせてくれます。六月の祝祭もそうです。あなたは急いで楽しんで下さい。ナイチンゲールは屢々、歌を途中で切って止めて仕舞います。野薔薇の花は直ぐに散って仕舞います。収穫月（2）がやって来ると、太陽が一杯です。

（一九一〇年六月十一日）

（1）フランス革命暦（共和暦）の第九月で、太陽暦の五月二十日頃から六月十八日頃まで。第一月は葡萄月で、同じく太陽暦の九月二二日頃から十月二一日頃までです。

（2）牧月の翌月で、太陽暦の六月十九日頃から七月十八日頃までです。

（完）

本書は、《ALAIN :PROPOS D'UN NORMAND I ;Gallimard,1952》の全訳ですが、電子書籍として公表するに際しては、容量の関係から上巻、中巻、下巻の全三巻とした。

『幸福論』（原題は「幸福についてのプロポ」）の哲学者アランは、一九〇六年から第一次世界大戦へ参戦した一九一四年まで殆ど毎日、フランスの地方紙「ルアン新聞（La Dépêche de Rouen et de Normandie）」へプロポ（語録）を掲載した。我が国でアランといえば『幸福論』が有名で、既に十名程の訳者によって各々の翻訳書が刊行されている。しかし私は、出来れば『幸福論』を書いたアランをあらゆる側面から理解したいと思った。殆ど毎日アランが書き続けた日々プロポを読んで、アランは生涯何を求めていたのか、その謎も私は理解したいと思った。『一ノルマンディー人のプロポ（Propos d'un Normand）』を毎朝読み続けてきた私は、アランの思想に啓発され、アランの思考と共に生きて来たように思う。出来るだけ多くのプロポを忠実に読み、アランの言葉に沿って思考してみたいと思った。

その間に、私はパリのアラン研究所やアランが眠るペール・ラシェーズ墓地、アランが第一次世界大戦から復員して一九五一年六月に不帰の人になるまで住んでいたパリ西郊の町ル・ヴェジネ(Le Vésinet)の小さな家、ノルマンディー地方のモルターニュ・オ・ペルシュ（Mortagne-au-Perche)にある生家やアラン博物館も訪ねてみた。そしてその謎を解く鍵は、哲学や芸術や文学を超えて、戦後の我が国の民主主義社会が最も欠落させてきたものも見せてくれるに違いないと思っている。アランが生涯求めたものは、アランが本格的に作品を発表したアランの思想の原風景であるこの『一ノルマンディー人のプロポ』などの初期のプロポの中にあると私は感じている。

これ等のプロポの初出は、前述したとおりノルマンディー地方のドレフュス派であり共和制支持の地方紙「ルアン新聞」に毎日掲載された記事であった。新聞記事であるが内容的には凝縮されたエッセイに近く、八年有半の三一二〇日のうち筆を休んだのは僅かに四〇日程であった。帰宅してから便箋二枚分の原稿を夜中に書き続け、時には東の空が白く明るくなってきたこともあったようである。アランは、二十四歳の時からリセ（高等中学校）の哲学教師であったから、昼間は授業もあった筈である。後年、ソルボンヌ大学教授への道も開かれていたがそれを辞退し、リセの一教師として六十五歳で定年退職するまで勤め上げたのである。

地位や名誉に心を乱すことの無かったアランは、人間の真実と社会の正義と平和を独自の眼で観て、独特な文体であるプロポに結実させていった。しかしながら、思想を体系化させることにアランは無頓着であったが、その思想は生涯を通して一貫していた。体系化されることによって生活の中身や実質から逸脱したものを思想と呼ばなかったアランの言葉は、恰も詩人の言葉のように質料や具現性があり、色や光に溢れている。詩によっても人は認識するし理解もする。それは代数学の定理のように誰もが理解出来る絶対的真理とは言えないものかもしれない。しかし、代数学の定理と併せて私にとって重要なことは一人ひとりの人間の真実であり、一人ひとりの人間が生活する社会の正義や公平さや平和への希求を実感できることであった。それらを正しく理解するには、時には代数学的論理に囚われない直感的理解や認識も必要になってくるように私に

は思えた。

私は毎朝、アランのプロポを読むことを習慣にして二十年以上になる。百年前の散文が私の眼前に広がると身も心も目覚める。朝の散歩のように私の頭脳を目覚めさせてくれる。そしてテキストを読み進んでいくうちに、何時しかアランは現代の我が国が最も必要とする思想家の一人であると確信するに至った。あるいは、プルーストが書いているように現代音楽の源泉がベートーヴェンへ辿り着くとするなら、現代絵画の源泉がセザンヌへ辿り着き、現代詩の源泉がランボオへ辿り着くように、私は現代哲学の潮流を源泉へ遡行するなら現象学を通してその一筋の流れは確実にアランへ辿り着くように感じている。

なお、この『一ノルマンディー人のプロポ I』の中には、『幸福論』の中の八章及び私の拙訳書『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売、二〇〇五年）の中の五十三章のプロポが所収されているが、今回新たに翻訳し必要に応じて加筆修正した。翻訳に際しては《ALAIN :LES PROPOS D'UN NORMAND DE 1906-1914;Institut Alain,1990-2001》（但し、一九〇九年版はどうしても入手出来なかった。）なども参照して最善を尽くしたつもりであるが、最良とは言えぬ至らぬ点もあろうかと思われる。それらは訳者の非力によるもので偏に私の責任であり、読者諸氏のご叱正を請う処である。

アランが現代の我が国に生きていたらどんな風に思考し、どんなことを言うだろうかと私は考えた。出来るだけプロポの精神と思想に沿ったつもりになって、『アランと共に』を電子書籍として二〇一二年五月に公表した。勿論、私の思考は直截的で熟考されていない点多々あるだろうが、それでも〈ざらざらとした現実〉の土を耕すことだけは出来るだろうと楽観することにした。そして、新たにこの『一ノルマンディー人のプロポ I』をお読み戴いた読者一人ひとりが、自ら耕した思考という土壤に、自らの手で自己を発展させる種子を蒔き、芽が出て、美しい花を咲かせ、明日の希望に繋がるものを結実させて戴ければ、私にとっては望外の喜びである。アランの思想の原風景ともいえる本書は、そういう意味で私の夢であり希望でもあったと思っている。

二〇一二年八月

東京西郊の田園都市の寓居にて 高 村 昌 憲

一ノルマンディー人のプロポ I (下)

<http://p.booklog.jp/book/55737>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55737>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55737>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ